
ある稲荷の神隠し

しいな けい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある稲荷の神隠し

【コード】

N1201U

【作者名】

しいな けい

【あらすじ】

【完結しました】

ある日突然紅葉山の稲荷神『あぶらあげ』の姿がなくなったのは

ひとの子の世でいつとこの十四年前。

「お兄様を返せ」

「俺は殺してるよ、紅葉山稻荷神のことを」

「力を貸しては駄目」

『柚子』は『あぶらあげ』を視ることができなくなっていた。

第一譚

「雨降ってきたな」

紅葉山の朱の鳥居に阻まれる空を見上げる。

曇り空は立ち並ぶ朱の鳥居に区切られ、長方形に切り分けられている。

この不安定な天候の中でも石段を登り続けるのは、麓にあるうちの豆腐屋で揚げたあぶらあげを奉納するためだ。

この習慣を初めて千年余り。

秋津家のこの苦行 いや習慣は、古くから女の役割なのだが、こうして俺が石段を登っているのは、今我が家に役目をこなす女が存在しないからだ。

となると、残された俺が代理をこなすしかない。

婿養子である父さんより無信心な俺が、この伝統を守るというのは矛盾すら感じる。

信じている奴が代わってくれるなら俺はそれで充分だと思うんだけど、父さんは仕事もあるし学生の俺が代わりをするというのは理にかなっていた。

この紅葉山は九尾の狐伝説が存在し、同時に稲荷大社が建立されている。

巨大な鳥居が山中を余すところなく杭を打つ稲荷大社は九尾の狐信仰と稲荷信仰が掻き混ぜり、信仰のない俺でもそれでいいのか？と思うくらいに一緒くたになった「お狐様信仰」というものが確立していた。

朱秦稲荷大社、九尾雅親伝承跡をはじめ巨大な山は朱の鳥居で赤く染まり、その壮観さがこのド田舎を観光地として生かしている。

この山のおかげで、集落は生きていた。

駅前から続くまっすぐの石畳は観光客が迷わないように整備され、表参道を通り山頂までの八八八段を登るまでが、地元産業の腕の見

せ所だった。

土産屋、団子屋、蕎麦屋。

学校病院公民館などは表通りから隠居させられ、裏手にひっそりと佇んでいる。

この町はこの紅葉山によって、全ての生活を支配されていると言ってもいい。

町の人口の半分は老人ということから、信心深い層はまだ残っているだろうが、果たして若いやつらはどう見ているだろう。

俺のようにただ商業活動のネタとしか思っていないだろう。

最も、俺の不信心を揺るがないものになっているのは、神様を信じ毎日供物を届けに山を往復していた母さんが、事故で帰らぬ人になってしまったということなのだが。

信じていても、結局は生きていたいという願いすら叶えてはくれない。

得られるものは何なのか、俺には分からない。

ただ母さんは、この山の又シである稲荷神の姿を視ることができたらしい。

秋津家が千年に渡ってこの山に供物を運び続けるのは、代々の女たちが母さんと同じような目を持っていたからだ。

たしかにこの山の稲荷神を視ることができれば、この毎日の苦行も楽しいのかもしれないが、信心深くないせいかそういう類のものは、産まれて十四年一度も目にした覚えがない。

が、実際のところ、会って何を話すんだ？

学校面倒くさいとか、世間はお先真つ暗な様子だとか、毎日つまんないとか、そんな話するののか？

一日で話のネタが尽きるよなあ。

そりゃ着物とか着てた時代は娯楽もないだろうから、話してるだけで楽しかったかもしれないけどね。

手の中の揚げたてあぶらあげに、雨粒がぼつりぼつりと落ちてくる。

分厚く重なる木々の下を行けば傘などいらないので、だらだらと石段を上がっていく。

怠い続きでもこうして続けているのは、偶然を装って会いたい人物がいるからだ。

腕時計を見ると、時刻は十八時五分過ぎ。

平日のこの時間大体参道に下りれば会える。

「祐喜ゆうき！」

声をかけられて怠そうに下げていた視線を上げると、ポニーテールが視界に入った。声をかけてきた少女の名前は秋津ゆか柚香。

俺の二つ上で十六歳。

うちの遠縁で、十数年前にここへ引越してきた。

今は都会の私立高校に進学してテニス部に入ったとかで、日々トレーニングのためにジョギングしている。

黒いスニーカーで石段を蹴るのを止めて、声をかけてきた。

「お疲れ様、お供物の奉納は終わったのかな？」

「そーだよ。ばあちゃんは今日も足が痛くて石段が辛いんだってよ」

「そんな憎々しげに言わないんだよ……祐喜はこの仕事、嫌なの？」

柚香が首を傾げるとポニーテールがひょんと揺れてみせる。

「嫌っていうか、そもそも……ウチの女の仕事だし」

ここ数年なんか山も鬱蒼として怖いなんて言つと、怖がりだと笑われそうなので言わない。

「神様は待ってると思うよ祐喜のこと。あ、そうそう帰りに届けに行こうと思つてた山芋の磯辺揚げ、はい」

柚香はぎゅうぎゅう詰めの総菜を手渡してきた。

「おっ、ありがとな。なんかいつも悪いな……」

「お母さんがいなくて色々大変でしょ。じゃあ、また明日会えたら」

柚香は軽く手を振って山頂一ノ宮へ向けて走り出す。

こうして柚香と会えるから俺は山に登ってる。

柚香は何かと母親のいない俺に気を遣って、ばあちゃんの世話や夕飯の残りを持ってきてくれたりする。

分家の人間だからか俺がこうして山に登って、供物を供える習慣を笑ったり馬鹿にしたりもしない。

それに柚香は俺と違ってそこそこ信心深いようで、昔住んでいた大江にもあった稻荷神社の御守りを持っていたり、神秘的なものに興味を示したりする。

だから俺は彼女に面と向かって神様なんているわけねーじゃん、とか言えない。

黒くて大きな目が、超自然的な話に興味を持って輝く様を何度見たことか。

昔、柚香は信心深いし、秋津の女なんだからこの仕事変わってくれ！ と、ばあちゃんに相談したことがあった。

この仕事を 『柚子』 を柚香に代わってもらえないかと。

だが、ばあちゃんはきっぱりと「無理だね」と言った。

この時のばあちゃんの対応は、今も俺の中では忘れられない。

額を押さえて大きなため息をすると、神棚に両手を擦り頭を下げ「ああ、本当にごめんよ。ごめんよ。どうしてこの子はこんなに自分勝手に馬鹿なんだろうね。どうして視えないんだろうね。どうして気づけないんだろうね……」

念仏のようにそう言って俺を卑下したのだ。

ばあちゃんにとつて、孫の俺より神様の方が大事なのだと知った。神様前提で回るこの町のシステムに、正直、反吐が出る。

俺は高校に入ったら絶対にここから離れて、柚香のように都会の高校に行く。

生まれてきた意味を、ただの代理の『柚子』としてしかみてもらえないようなこんな田舎とは早々におさらばだ。

帰路についていた俺の視界の端、石畳の上に落ちたお守りがあった。

「あれ、行きには見なかったよな……」

御守りはピンク色で、根付けが千切れたのだろう。

まだ濡れてはいないので、落ちてそんな時間は経っていないよう

に見える。

キティちゃんが刺繍されているお守り。

大江山稻荷大社と金糸で書かれているので、このあたりの土産屋の売り物が落ちていているわけではない。

柚香のケータイについているストラップの一つだと気づく。

たしか大事にしていたはずだ。

届けてやらないと困るよな。

っていうか、届けるって口実で柚香の家行っつてのもいいよな。

ふうむ。別に不自然じゃない。ごくごく自然な流れで柚香の家に行けるよな。

お守りをポケットに入れて、駅前にある柚香の家へ進もうとしたところで足が止まった。

雨の為に早々に店じまいした、雨の三ノ宮参道。

暗闇に押しつぶされるように参道脇の竹林から柳のように竹の葉が垂れ、道のトンネルになっている。

ぽつりぽつりと落ちる雨粒が、景色を縫って落ちていく。

雨粒が落ちていているそこは、俺の目に物体があるように見える。

本当ならそこで、雨粒は物体の肩や腕に落ち、跳ね返らなければならぬ。

その自然の摂理をねじ曲げて、まるで幽霊のようにそこに影が立っていた。

時代錯誤の昔のお姫様のような丈の長い若竹色の着物。

幽霊のように長く垂れた白銀の髪は、同様に雨に濡れた様子もない。

唇をぎゅっと噛み、青い目でこちらを睨んでいる。

視線が合うと、逸らせない。

「え、と　どうかしましたか？」

周囲に人影はないので、もちろん睨んでいるのは俺だろうが、初めて見た相手に睨まれるような悪いことはしていないはずだ。

まるで投影機に映しているかのように、女は少し揺らめいて見え

る。

「……私が視えるのか」

俺が感じていた違和感も拭えるだろうと近づくと、同じように着物の女は俺へと歩を進めて距離を詰めた。

膾炙楼に揺れる美しい 女だった。

「やっと私を視えるようになったのか『柚子』」

距離を近づけたことで、俺は足を止め雨の檻に閉じ込められた。

視線だけが忙しく女の姿を確認する。

金色の簪、飴色の襦袢。

少しつんと上がった目を縁取る化粧と口紅。

だがやはり、雨粒は女を透過する。

この世のものであって、そうではないもの。

なにより俺を『柚子』と呼んだことで、結びつくはずのない思考ががっちり組み合った。

「お前……って、まさか」

視線を女から、背を覆うようにして聳える紅葉山へ移してそれから女へ戻す。

女は俺をじつと見つめたままだ。

「まさか……嘘だろ。お前が……」

女は俺の言葉を見無視し、衿を掴んだ。

雨粒は女の存在を見無視したのに、なぜか女は俺に干渉できた。

懐から見事な扇を取り出すと、女は容赦なく俺の左頬を打ち据えた。

「……痛っ……」

幻想的な空間は、その一撃で醒めた。

いきなり叩かれれば、誰でもそうだろうが。

「お兄様をどこへ隠した」

「おにい……？」

「お兄様を 帰してもらっぞ、『柚子』」

青い瞳に吸い込まれるように、俺はそのまま体中の自由を失い強

制的に意識を手放した。

第二譚

衝撃で俺は飛び起きた。

腹を押さえて咳き込むと、目の前にさつと水が差し出される。

ああどうも、と仰いだところで、切り子細工のグラスを差しだしてきた相手が視界に入り、口に含んだ水を思い切り噴きだした。

水を差しだしたのも、俺の腹に一発入れてたたき起こしたのも、見知らぬジジイだった。

白髪交じりに皺の線がいくつか入った頬。

目尻に年気の入った皺。渋い横顔に、眼光だけは鋭くビー玉のように輝く青。

俺が口に含んだ水が噴き掛かるはずだったが、俺の行動を読んだのか年にそぐわない俊敏な動きで避けてると、膝に乗せていた手ぬぐいでさつさと飛び散った飛沫を払ってみせた。

「銀朱様、起きました」

「怠惰だな。一体何時間寝れば気が済むのか」

聞き覚えの有る女の声と容姿。

改めて左右を見回すと俺は畳に横たわっている。

一段上がった上座に頬を殴打した女が、悠長に脇息に肘を置いて俺を見下ろしていた。

「あ……」

周囲を見渡すと立派な書院で、引き違い戸と互い棚には盛大に花が生けられている。

春夏秋冬の全ての名花を詰め込んだような鮮やかな生け花に負けないくらい、女の身につけている着物は美しかったが、それすら霞むほどに白銀の髪は艶めいている。

よし、大丈夫。俺は冷静な判断ができています

「お前……『あぶらあげ』だな！」

この女は俺を『柚子』と呼び、そして、やっと私が視えるように

なつたのかと言った。

この時代錯誤な意匠に人外の容姿とくれば、想像するものは一つだけ。

先祖代々の『柚子』達が視てきた、紅葉山稻荷神以外思いつくものはない。

ちなみに『あぶらあげ』というのは、先祖が名付けた紅葉山稻荷神の愛称で、俺もそれはしつかりと叩き込まれている。

もしそれ以外に選択肢があるとしたら、これは夢だということだけだ！

「違つわ、この愚図め」

……

……

女は即否定した。

それはもう、俺をがっくりさせるには充分なくらいに、バツサリと。

心底嫌だと言わんばかりに、女は美しい顔を歪ませて眉間に皺まで寄せてきた。

「あ、違つ。そー……すか、じゃどなたさんです？」

そうだ、考えてみれば俺は神様が存在しているなんて信じていないんだから、そんなわけがない。

となると、彼らは紅葉山で口ケをしていた時代劇の

「私は『大江山』だ」

……

……

次は思考を三十度ほど回転させた処にある言葉を口にした。

大江山。

おおえやま、というのは電車で三十分の処にある山のこと……でいいのだろうか。

だが、「私は」という説明はおかしい。

ここは大江山だと言いたいのだろうか。

だとしても大問題だ。

「大江山って、今何時だよ！ 終電二十一時にはもうないんだぞ！ この誘拐犯！」

俺が慌てる様を遮るように、女は畳を思い切り叩いた。

スパンと見事な音。

場を切り裂くその音に、怒りが俺に向けられていることだけは理解した。

「やっとそなたとこうして話ができるのだ。家に帰す訳にはいかぬぞ」

何が何だか分からないが、女は俺に話があるようだ。

「は、話って何す……か」

「お兄様のことだ。お兄様をどこへ隠した」

オニーサマ。

お兄様。

兄貴……？

「誰の……えつと……あんたの？」

女の青い目が本当に弓のように細くなる。

訝しげなその視線はとなりのジジイも変わらない。

そんな目で見られても、困る。

俺だつて妹がいれば「お兄ちゃん」とか呼んでもらえることもあったかもしれないが、母さんは妹を残してくれなかった。

「そなた『紅葉山』のお兄様を知らぬと。『柚子』でありながら知らぬというのか」

お？ やつと良く知った地名が出た。

「えと……あなたは大江山さんで、紅葉山に兄貴がいて……俺が『柚子』の一族であることを知っていて……んでもって俺がその兄貴をよく知っていると思っていらっしゃるわけ？」

整理のためにそこまで口にする、俺はその構図の記憶を瞬間的に掘り当てた。

これはばあちゃんがガキの頃の俺に、寝枕で聞かせてくれた話。

俺たちが供物を届けに行く紅葉山稲荷神には妹がいる。

大江山の稲荷神、名前は銀朱^{ぎんしゆ}。

ばあちゃんは何度もこの稲荷神とケンカをしたという。

白銀の稲荷神で、ものすごく上から目線。

ドSで鬼畜で容赦がない鬼のような稲荷神だが、とにかく美しい稲荷神であったと。

改めて女の姿を視る。

ばあちゃんから聞かされて思い描いた姿そのままだった。

いや、そのまますぎる。まるで俺の妄想がそのまま形になったかのような出で立ちだった。

女が「阿呆な顔をしておる」と憎々しげに俺に毒づいてきた。

恐らく俺は、狐に摘まれたような顔をしていたに違いない。

となると、こいつが銀朱だというのなら、俺の隣にるジジイは

「茂野^{しげの}……じゃない……よな、あんたまさか」

乾いた口で記憶にある名前を零すと、女はバシバシと畳を扇子で叩き俺にキンキン声で怒鳴ってきた。

「私のことをお兄様と間違えたくせに、なぜ侍従の茂野だけは間違えぬのだこの大馬鹿もの！愚図！」

茂野。ばあちゃんにとっては助け船だったと笑って話してくれていた。

いつも『柚子』と『あぶらあげ』の邪魔をする銀朱を、やんわりと引き離して大江山へと連れ戻してくれた、銀朱の侍従。

ぼろりとこの話を柚香に漏らした時に、柚香もこの名前を知っていた。

柚香も視えているのかと思ったら、違う。

驚く俺に柚香は笑った。

「大江山の茂野って桜のことでしょう？大江山の社殿にある大きな桜の木は、茂野っていう名前がついているんだよ。桜の名所の葵山から寄贈されたんだよ。綺麗だよな」

あくまで人の世界での認識だったようで、取り乱した俺の方が恥

ずかしかったという記憶。

もしかしたらばあちゃんも、大江山の桜の名前を知って創作したのかもしれないが、その創作の人物が俺の横に正座をしている。ヤバイ、頭おかしくなりそうだ。

両者へ視線を投げてから、目を擦ってもう一度視た。変わらず女　銀朱と茂野は存在していて、挙動不審な俺を冷たく見下ろしていた。

いや、だけど俺は神様なんて視えないんだぞ？

もしかしてこれはばあちゃんが仕掛けたドッキリとか……

「ふん。動じておるわ、この愚図めが」

銀朱は手元の茶を手に取ると、俺の動揺には興味がなさそうに喉に薄茶を流し込んだ。

「我らが見えぬはお兄様にちよっかいを出さず結構と思っておったが、それを逆手に取って色々としてくれたのう」

「なっ……なんだよ！　俺は何もしてないぞ」

「お兄様を帰してもらおう。お前が関わっているのは百も承知じゃ」

「だからッ……俺はお兄様とか知らないし、紅葉山の稲荷神を視たこともない！」

「ならなぜ……お前は私を視ている。本当は見えていたにも関わらずその振りをしていたのだろう」

俺が逆にそれを知りたい。

説明を求めようとすると、茂野は俺の衿を掴んでひょいと持ち上げた。

十四歳の健康男児をまるで猫のように持ち上げたものだから驚いた。

離せと暴れてみせると、ポケットからぼろりと柚香の御守りが落ちた。

俺を下ろすと、茂野は落ちた御守りを拾い上げた。

「これに違いありません、銀朱様のお力を感じます」

茂野は懐から紫色の布を出してそれに乗せて丁寧に銀朱に手渡し

た。

なんだか俺がばい菌か何かみたいない扱いだ。

「それが何だよ。それは袖香の落とし物だ！ 返せよ」

銀朱は御守りを厳しく吟味してみせると、茂野の手を通して俺の手に戻した。

「どうやら無信心のお前がこうして私を視ることができたのは、『袖子』としての素質と、その守り札に込められた強い願いによって繋がった一時的な現象のようだな」

つまり俺はこの御守りに込められた力によって、こいつらを視るに至ってしまったということだろう。

この御守りを捨ててしまえば視えなくなるのかもしれないが、これは袖香が大事にしていたものだし捨てられない。

「ふむ。となると、信心深くないお前にはお兄様を拐かすことはできぬか……」

銀朱は俺が『あぶらあげ』を視れないことを理解してくれたらしい。

「納得したらもういい？ 帰らせてくれ。ていうか目を覚まさせてくれというべきなのか、悪いけど終電がなくなって帰れない場合タクシーを……」

クラクラしながら腕に巻いた時計を覗き込み、時間を確認して思考が止まる。

本来なら六十回秒針が回り一回長針が動くはずの時計は、高速再生をしているかのようになり長針と短針が秒針のような動きをしていた。時計が壊れるというなら止まってしまおうのが常だと思うのだが、まるで生き物のように針はめまぐるしく回転を続けていた。

「なんだ……これ……」

それにこの部屋、よく見ればなんだか変だ。

床は畳だというのが分かる。

立派な欄間も柱もあるのが分かる。

だけど何か薄い膜に覆われていて、実体があるようで ないよ

うで、重なり合う境を意識しようとする今以上に酔ってしまいうだ。

「お前が拐かしたのではないとすれば、では残る可能性は二つ」

銀朱は俺の混乱など余所に、右手に持った扇をパターンパターンと開いて閉じてを繰り返す。

「お兄様は旅に出てしまわれたか、それとも真に　消えてしまっただか」

「どっちにせよもう俺には用はないだろ……？　今何時なんだ、本当はここはどこなんだ！　教えるよ！！」

俺の叫びを銀朱は無視して、面を上げて俺を睨んだ。

「お兄様を呼べ。そなたが我らを信じお兄様を呼べばお兄様は絶対に反応する。帰すのはそれからだ」

「そんな事はどうだって」

銀朱は床の間に飾られていた長刀を手にすると、軽く回転させて刃をこちらへ向けた。

その鋭い切っ先に驚き、息を飲んだ。

「どうだってよい？　『柚子』であるお前がその口でよくも言えたものだ」

今までの『柚子』であればそんなことは絶対口にしなかつただろう。

『柚子』はすべからく『あぶらあげ』を好意を持って接し、愛していた。

だからこそ千年の長い間、代を変え毎日供物を届けに行っていたわけだ。

千年前の初代『柚子』。

この初代が紅葉山稻荷神を視たのがはじまりだった。

『あぶらあげ』というニツクネームをつけたご当人。

無邪気にも『あぶらあげ』の処へ十四歳になったらお嫁に行くと約束し、そして（当然）叶うことなく人間の旦那を迎えて子供を産み、長女が『柚子』の振りをしてまた山に登った。

だから女が代々この役目を負っている。

『あぶらあげ』がいるとして、『柚子』が代替わりしていることに気づいているのかそうでないのかはよく知らない。

でもばあちゃんは、自分ではない先祖の『柚子』を演じ『あぶらあげ』を送った日々を、今でも宝物のように思っているようだ。俺がはねつけるので俺に話しをしたりしないがよく父さんに話をして
いる。

神様が特別に自分を慈しんでくれるという体験は、たしかに自慢話になるかもしれない。

それでも俺はひねくれているのか、ばあちゃんだって結局『あぶらあげ』が好きだとか、大事だとか言いながら、じいちゃんと結婚して母さんを産んだ。

つまり『あぶらあげ』を捨てた。

俺と同じ、否定したのだと思う。

「俺は『柚子』じゃねーよ、先祖とは違うんだ。俺は俺の生き方がある」

「お前単体などどうだっていいことだ。何であれ『柚子』が脈々とお兄様に関わってきた事実は変わらない」

「俺はなあ、そういうのが大嫌いなんだよ！　ひとくくりにして勝手に評価すんな！」

俺が否定するが、銀朱は一向に差し向ける刃を引かない。

それどころか名案とばかりに目を細めた。

「鳴かぬなら泣かすか。『柚子』の命の危機を知れば、お兄様もお姿を現すかもしれんのだ」

銀朱は全く躊躇いを見せる様子がない。

息巻いて刃の切っ先を、俺の鼻先に突き出してきた。

「呼びかけにも一切お応えにならないとしたら　お前が、お兄様を殺したのだ」

「誘拐疑惑の次は、殺人疑惑かよ！」

「我ら神が有り続けるためにはひとの子の信仰が不可欠。『紅葉山』

を支える『柚子』のお前がこれほどまでに無価値、無信心ということはお兄様を殺す刃となつていてもおかしくはない」

「待て待て！！ 俺一人なんかが、神様を殺せるのかよ！」

「殺せる！」

予想を遥かに超える断言に、思い切り心臓を捕まれた。

逃げ腰のまま静止してしまう。

「『柚子』ならお兄様を殺せる。憎いがお前達はそれができる。お兄様にとってあまたのひとの子と、そなたらは別だ。お兄様は『柚子』を特別に寵愛している。それは裏を返せばお前がお兄様を殺せるということだ」

ヤベー俺、神様を殺せるのか。

なんかすごくないか……？

あ、いやなんつーか。別に殺したいとかそういうんじゃない、字面の格好良さとしてね？

恋は人を殺せる、とかいう一説に近いのだろうか。

こいつらが本当に稲荷神だとして 概念的なイキモノであるなら、そういう考え一つで確かに生かしたり、殺したりはできそうだけだ。

でもまあ、俺は恐らく『柚子』として見られてないし、愛されてもないと思う。

「いや、そんな、重大な話聞いたことないっす……。それにほら、『紅葉山』は観光名所で信心深い人もいっぱいいるから、俺が信じてなくても消えるってことはさすがに……」

「ではお兄様はどこへ行ったというのか！ 自由気ままな方ではあるが、お兄様を感じられなくなることは今まで一度もなかった！」
びゅん、と前髪を刃が掠める。

肩を竦めて逃げようとするが、障子はしっかりと茂野が押さえて無表情で俺を見て居る。

銀朱が長刀を振りかざすと今度は俺の肘を掠めた。

切っ先が擦った俺の皮膚に、朱色の線がさつと引かれる。

赤い雫が痛みと共に溢れてきた。

この痛みは、マジだ。

これは夢でもドッキリでもない。

銀朱はマジで俺を誘拐犯だか殺人犯だかだと思っているし、人を殺すことに引け目など感じたりもしない。

身を守るために長刀の握り手を掴んで取り上げる。

そっちがそのつもりなら、俺だって殺されるつもりなんてない。

だが武器を取り上げて手にしたところで、全く動かなかった茂野が俺の腕を叩きつけ、長刀を奪い取った。あつという間もなかった。

俺には会話の優先権以上に、生存権すら存在していなかったというところらしい。

茂野にグサリとやられるかと思いきや、追撃はなく銀朱が飛び込んできた。

次の手は扇子でビシバシと攻撃かと思いきや、握りしめたグー手をばかばかと叩きつけてくる。

いや、全然痛くないですよ、銀朱さん……。

「この！愚図めが！ どちらにせよお前がすべての原因だ！」

手はひやりとしていて現世のものとは思えない不思議な体温だった。

空にかかる虹の温度を想像する。

暖かいような、冷たいような。

「お前達のことをお兄様がどれだけ慈しんできたと思っている。あなたは恐れ敬う心を忘れ兄様を殺したのだ。いつからひとの子は、目で見えるものだけを信じるようになったのだ！ 嘆かわしい！」

「しょ、しょうがないだろ！ だったらお前も今日に見えない兄貴のことを信じて待てよ！」

「我らはもともと、視覚などに頼りはしない。そんなものに頼るのはお前達愚鈍なひとだけであろうが！」

ばかばかしてくる手を掴んで止めさせるが、紅を引いた口は閉じることがない。

「さあ早くお兄様を呼べ！ 私が呼んでも呼んでも、お兄様は答えでは下さらない。悔しいがお前しかない。お兄様が愛し続けたお前しかない！」

「呼べて、どうすりゃいいんだよ。神様を信じてねえ俺でもいいのかよ」

「お兄様を想えばいい！ 今まで貴様らはそうして来ただろう！」
俺は一度だって、好意をもって『あぶらあげ』を想ったことがあっただろうか。

いや、ない。ないな。

だから想うとしてもそれは無感情で、無信心で、銀朱の言葉が正しいのなら想うことで逆に殺してしまうのではないかとも思う。

「そういう話なら……俺は多分、お前の兄貴を殺してるよ」

銀朱の勢いがまるで無かったかのように収まった。

俺に馬乗りになっていた銀朱の顔が近い。

白すぎる頬は、大江山の境内に咲いている白梅の色。頬の紅は桜。何度も何度も……心の中で紅葉山稻荷神のことを俺は殺してるよ。淡々とした言葉に、俺の本心をくみ取ったのだろうか。

聞き返すことも否定を求めることもなく銀朱は頂垂れた。

「俺は神様なんて信じてない」

第三譚

青い宝石のような目が潤んで、目頭から大粒の涙が落ちてきた。俺が信じないことで泣くものがあるなんて思いもよらなかった。息を詰まらせて泣く銀朱を見つめることしかできない。

泣く銀朱に呼応するように、部屋の外から雨音を感じた。

さあさあと雨が社殿の蛤葺き屋根にかかる音が泣き声と合唱する。さすがに罪悪感が生まれて、おそろおそろ銀朱の肩に手をとんと乗せる。

触れると艶やかな絹の心地と、そこに『存在』していると錯覚する質感が返ってきた。

「いや、なんつか……町の中では本気で信じてる奴いっぱいいるから、俺が全否定したから消えちまうってことはさすがにないだろ」顔を押さえて泣く銀朱に俺の言葉が届いているかは分からない。やばいな。女の子を泣かせたのはこれが初めてだから、どうしていいか分からない。

いやまて、こいつ神様なんだから女の子とかいうのとは違うか。つか、泣かれたって……困るし。

「泣くなよ、泣いたって……俺には関係ないんだからな」

その言葉に銀朱は吹っ切れたように顔を上げた。

「お前が殺した……！ 相違ない。貴様がお兄様を殺した。ひとの世で千年にも余る寵愛を、貴様一代が無残に踏みにじって、残酷にもお兄様を殺したのだ！」

顔を覆っていた手をわななかせて、小刻みに震えている。

「お兄様はお前などを相手にされるべきではなかった。情理に欠けた愚図めが」

「そついつのを一般的に片思いの逆ギレっつーの！ 好きになるのは勝手だ、でも受け入れるのだって勝手だろ。俺には選択肢のひとつもないっていうのかよ！」

何か銀朱は俺の考えを見透かしたような眩きを漏らすと、きつと鬼の形相で俺を見た。

「ない」

これまた、思い切りある断言だった。

「貴様のような愚図に、与える選択肢などあるか！」

地獄の底から響く咆吼に凄み加わる。

「思わずのけぞり逃げ出したくなるが頭をがっちり両手が押さえて離さない。

「貴様には、ひとの子として存在する上でもっとも残酷な祟りを与えてやる」

「全般的に俺にはどうしようもないことだろ！？ 逆恨みされても困るんだよっ！」

俺は銀朱に負けないように声を張り上げた。

「それになあ！千年にも余る寵愛がどうかお兄様を殺したとか、それを言うならこつちだつて言いたいことはあるんだぞ。神様は『柚子』だった俺の母さんを助けてはくれなかった。俺はともかく母さんは信心深かった。父さんと結婚するまでずっとお前の兄貴を信じてたし愛してたよ。それなのに無残に事故死したんだぞ！」

俺はチャンスとばかりに畳みかけてやる。

「事故から助けてやることもできないのが神様かよ！ 特別だったとか何とか言うなら、母さんを助けて、母さんの願いを叶えてみせろよ！」

銀朱は俺の勢いなど屁とも思っていないようだ。

瞬き一つせずに俺を睨んでいる。

「ひとは死ぬものだ。必ずだ」

「だとしても……！ それをどうにかできるのがお前らじゃないのかよ！」

「信じていない存在に奇跡を望み、恨みを押しつけてきたのだとしたらそれも逆恨みと同じだ。お兄様にも私にもどうしようもないこと、逆恨みされても困るのだ」

銀朱は口角を上げて笑みの形を作る。

「お前は神を信じていないと言った。だがそれは撤回すべきだ。あなたは我らから恩恵を受ける前提の心構えで、勝手に裏切られたと喚き否定しているに過ぎない。その否定は信じた上で起きるものだ。つまりお前は 負の方向性で、偶像妄想の類ではあれ、神を信じているのだ」

「違う！ 信じてない！」

銀朱の屁理屈だ。

言葉巧みに俺が悪いと誘導しているだけだ。

「神などいないと言い切るなら、母の死を運命だったと受け入れるべきだ」

俺は下唇を噛んで言い返すための言葉を探した。

だが、見つからない。

見つからなくて悔しくて奥歯を鳴らした。

「愚図が」

振ってきたのは侮蔑の一言だけではない。

白い足袋が肩に乗り、板間にひれ伏した。

屈辱的な圧力を跳ね返す力がないのもまた、俺が反論できる力がないからに違いない。

逆らおうとして力を込めて視線を見上げると、白い足の間から飴色の襦袢が覗く。

それ以上視線を上げようとしても踏みつけられて顔を見ることもできない。

『あぶらあげ』と『袖子』の関係なんて本当にイレギュラーなもので、本来神様とひとの距離というものは、こういうものなのかもしれない。

銀朱は俺を踏みつけたまま黙って控えていた茂野の名前を呼び命令した。

「茂野、絶対にこの愚図をひとの世には戻すな」

「承知しました」

「えっ……おい！」

「のう愚図、よい事を教えてやろう。お前がここで一晚を明かせばひとの世では軽く三年は過ぎる」

鈴のような泣き声を可哀想だとか思った俺がばかだったのか、陰湿ささえ帯びた声色で銀朱は俺を見下しせせら笑った。

「ひとの子の世は一代およそ八十歳。一ヶ月ここに捕らわれているだけでお前を知るものは死に朽ちる」

腕時計は今も尋常ではない速度で短針を長針が追い越している。

秒針は昆虫が羽音を立てるかのような速度で巡り、すでに目で捉えることができない。

「最高の苦痛は忘れさられる事。己を知るものが完全に途絶えることだ」

ばあちゃんも、父さんも、柚香も、学校の友達たちもいなくなる。途中で俺の存在は諦められて消えるだろう。戸籍も消えて俺というものが白紙となる。

もし俺が元に戻れたとしても、誰も俺を認識しない。

人も、法律も、俺は頭がおかしくなった人間としか見てもらえずに終わるのだ。

己の存在死を思い、さつと額に搔いていた汗が冷えた。信じる信じないではない、銀朱の目は真に迫っていた。

「怯えておるなあ、嫌か？ 嫌かの？」

「そんなの、嫌に決まってるだろうが！！」

「それが貴様がお兄様に打った仕打ちだ。お前も愛するものに忘れ去られる苦しみを味わうといい」

力なく板間に頬を擦りつけひれ伏す俺に銀朱は淡々と言葉を紡いでいく。

「それが嫌なら、すぐさま悔い改め信奉しお兄様を呼び戻すのだ」

「冗談じゃ ない。」

逃げようと立ち上がったところで、茂野の左手が伸びて膝の裏を打った。

「逃がさないと云った傍から、学習能力がないな」

銀朱に踏まれた後は、今度は茂野に踏まれた。

銀朱の青い瞳を下から見上げると禍々しく輝いている。

神様というものがいるとしたら、それはとても無慈悲で、残酷で気ままなものだと思っていた。

その通りすぎて 信じる他にないのに、それでもどこかで俺は自分の考えを否定して欲しかったのだと気づいた。

そうじゃないんだ、神様は本当は優しいものなのだ。

そう言っただけだった。

「貴様のような愚図の役目はただ一つ。神を信じお兄様をお戻しすること、たったそれだけだ」

扇で口元を隠しているせいで表情の全容は分からないが、笑っているとしたら心臓を捕まれるかのような、恐ろしく 神々しく美しい笑みだったに違いない。

多くのひとが、畏怖の象徴としての側面で描いた神が俺に微笑みかけている。

「さあ……喉が切れ朽ちるまで、お兄様を呼ぶために鳴け」

第四譚

顔も知らない人に慣れ慣れしく呼びかけて、応えてくれる人がいると思う？

思わないよな。

だって答えたら変人だろ。普通に考えて。

あえてその状況をあり得る形にもっとくとしたら、借り物競走で見知らずの「鈴木さん」を探すといったところだろうか。

それでも随分と条件が違う。本来はグラウンドっていう「舞台」で「借り物競走」をする役者だから、「客席」にいる「鈴木さん」だって名乗り上げてくれるものなのだ。

客席側は呼ばれるワクワク感だってあるし協力的だろう。

だが俺の場合は違う。

俺がこの「借り物競走」で引き当てたのは「神様」という得体の知れぬもの。

形も分からなければ、声も知らないもの。

雲を掴むような、借り物競走だ。

借り物競走主催の銀朱から与えられた役目は「神を信じ」『あぶらあげ』を呼び戻すこと」。

それが出来なければ祟りをくらって存在死を食らわされる。

容易なことじゃない。どっちに転んでも俺はババを引く。

それも身から出た錆だと銀朱は言うのだが。

しかも、のんびり人捜しすることもできない。

俺がいるこの大江山稲荷大社の社殿は、ひとの世ではない。

この稲荷の世の一晩が、ひとの世の三年に相当するといふのだ。俺は今猛烈な勢いで一週間、一ヶ月を浪費していることになる。後ろからピストル突きつけられながら、借り物競争で人捜ししているとゆうーことである。

しかも俺が認められないと目を背けてきたものを、いきなり受け

入れるというのは難しい。

認めようとがんばってみてるけど、そう簡単にうまくはいかないんだ。

俺は途中で当てもなく呼び続ける作業に疲れ、ポケットの中のキティ守りを取り出して、柚香を思った。

俺が行方不明だって知ったら、柚香はどう思うだろう。

スルーってことは、さすがにないよな。

だってほぼ毎日会ってたしウチのこと気遣ってくれてたし、心配してくれるよな。

もし誰も心配してくれてなかったらどうしよう。

「……『あぶらあげ』は、いいよな」

こえー女だけど、銀朱にあんな風に思って貰えて、いいよな。

戻ってきて貰いたいって思ってもらえてるんだ、『あぶらあげ』は。

ぼんやりと御守りを見つめていたところで、ふと思いついた。

俺が御守りをみて柚香を思うように、何か具体的なキーワードを頭に叩き込めばいい。

神様ってものを、俺が理解できるような足がかりを作ればいいんじゃないか。

「あのさあ……」

銀朱に声をかける。

本殿のたっぷりとした座布団に座っている銀朱は微睡みの表情を浮かべたまま煙管を吸っていた。

妖艶という言葉をこの間工口本で知ったけれど、銀朱はその言葉がぴったりと合う容姿だと思う。

悪いけど柚香はちょっとあと十数年はない色気だ。

最初は無視されたが、もう一度声をかけると嫌々銀朱はこちらを向いた。

「『あぶらあげ』って……どんな兄貴なの」

今更すぎる問いかけで、銀朱からすれば『柚子』らしからぬ質問

に違いない。

また往復ビンタをするつもりかもしれないが、銀朱は手招きした。広い本殿の端で縮こまっていた俺は、のそのそと銀朱へ近づいた。近づけば近づくほど、銀朱の白銀の髪が目にもまぶしい。

「愚図に口で説明しても百年かかる、もったいないが、よいものを見せてやるう」

怒鳴られるかと思いきや、想像をまた斜め向こうに外したテンションで手元の紙束を自慢げに俺に差し出した。

俺が『あぶらあげ』に興味を持つことは、銀朱にとっては喜ばしいことなのかもしれない。

かすれた古紙に描かれた絵。

所謂、錦絵というものだろう。

どれも鮮やかな紅葉が散る背景。

月と太陽、稲穂と森の緑を背にして人物が描かれている。

「やっぱお前の兄貴だけあって悪なんだな……」

説明書きに『悪狐紅葉山』って書いてある。

この流れでいけばこいつを描いた錦絵は『悪狐大江山』に違いない。

「誰のせいだそう呼ばれておるか知らずにのたまうとは、図々しい」

「また俺のせいですか……」

はいはいすみませんと、なかば投げやりになって反応する俺に、

銀朱は怒気を孕まずに静かに俺に問いかけた。

「この悪の文字を、貶めることは許さない」

怒鳴ってくれた方が俺としてはリアクションしやすかったが、銀朱の深沈たる様子に俺は黙った。

指の腹で銀朱はそつと、錦絵の隅に描かれた金色の髪の人物を撫でる。

その仕草は、深い愛情を感じた。

「お前、本当に 兄貴が大事なんだな」

「そう思い同情の視線を投げかけてくるのであれば、さっさとお兄様を

信じ敬いお戻りになるように念じる」

ギリギリと銀朱の目線が痛い。

そのために聞いてるんだろ、と言うと銀朱はやっと射殺するような視線を止めて次の錦絵を差し出した。

これが私のお兄様だ、とどこか自慢げだ。

これは肉筆画で、刷ったものではないようで悪の文字はない。

恐らく紅葉山だと思われる山を背景に、横顔が描かれた一枚は他の錦絵に比べてずっと穏やかな表情をしていた。横顔が見据える先はどこだか分からない。

空の青は錦絵らしい深い群青で、風に吹かれて散る紅葉と同じ赤い眼をしている。

滲みのない真っ黄色の髪は、秋の稲穂の金色に似ていた。

紅葉山の史跡に誰かが残した歌が残っている。

ひとの財で求めること叶わず。ひとの願いで彩ること叶わず。ただ神の嗜好のためだけに彩る。

意味するところは、「この景色はあんたら人のもんじゃないよ、

神様に捧げるのがベストじゃねーか!？」ってところで、もっと要約

すると、「紅葉山の景色パネエ！」ってところだろう。

その歌を思い出す絵だった。

何も言わずに絵を見る俺を、銀朱はじっと観察していた。

「その顔 お前は本当に、お兄様を知らないし、視た覚えがないのだな」

黙って頷くと、銀朱は俺の手から錦絵を引き抜く。

埃を払うようにして俺が触ったところに息を吹きかけ続けた。

くそ、ばい菌扱い、ホントやめろよな。

「愚図のお前のことだ、自らお兄様を感じることができずどうせ視覚に頼るだろう。恐らくお兄様を捉えた時はこの錦絵の通りのご容姿で見ることになる。よく覚えておいて、視たらすぐに私を呼ぶのだぞ」

「この絵の通り……? どういうこと?」

「私達はひとの子のように、特定の『形』というものが定められてはいない。お前達ひとりひとりが想像する姿がそのまま具現しているに過ぎない。見る者が見れば姿は違って見えようものだ」

「えー、じゃあ例えば俺がお前のことキティちゃんだと思えばキティに見えるっていつのか」

「きてい何が何だか知らんが、全く属するものが違うものには重ねることはできない。我々にも象徴というものがある。それもまた、ひとの子が思い描き重ねてきたものだ」

そうか、大江山の狐伝説は白狐だった。

だから銀朱は白いのか。

鬼を食い破った狐伝説なんかも残ってる。

小動物のくせに強いな、おい。

なんて思ったことがあったがそれも反映されているに違いない。

俺を踏んだり蹴ったりしているあたりとかな。

なんとなく理解する。

それが、こいつらの『個性』なのだ。

「……そっか、じゃあお前の象徴って、何なの」

「私は退魔だ。鬼・疫病の類を寄せ付けること許さぬ」

うん、ああ、そうだな、そーゆー感じするわ。

問答無用だし、変にまっすぐな感じあるしなあ。

「お兄様が持つものは豊穰だ。黄金の髪は豊作を意図し、赤い目は恵みの根源血潮を意味する」

「なるほど、まあ紅葉山はたしかに、他の田舎と比べて山のおかげで恵まれちゃいるな……」

俺はこの絵で『あぶらあげ』の先入観がついた。

借り物競走をするとしても、借りるものが何だか分かるのと、分らないのでは随分違う。

俺はやっと、どういふものかを掴みかけてきた。

ぼんやりしていたものが、随分とはつきりした。

だけど俺の持ったイメージも偶像の一つでしかないということだ

ろつ。

神は風にも在る。山にも在る。紅葉にも在る。細部に宿る。思えば、神はどこにでも在る。なるほど。

「だからお前」

目の前にいる『存在』をじっと見つめる。思わず手を伸ばして銀朱の顔に触れた。

「お前、神様なんだ」

その純粹な感想こそが、証拠抜き確信というのかもしれない。俺は、まっすぐに神様というものを信じた。理屈を越えて真相を理解した。

神様はひとが長い時間をかけて作り上げてきた意志の蓄積。本質は先人が築き上げてきた願いそのもの。相互依存の関係、表裏一体なのだ。

「お前、神様なんだな銀朱」

何万もの祈りが作り上げた銀朱という『存在』を視た。ひとの意志という彫刻家が生み出した存在。はじめて視たときから、綺麗だと思ったんだ。

俺以外の誰が視ても、銀朱を綺麗だと思っただろうな。俺は大江山のことは詳しくないから分からないけど、大江山には、物いう花の伝承が残っているのかもしれない。

大江山に蓄積されてきた数百、数千、数万のひとの祈りの形。

『柚子』はたった一つの『ひと』でありながら、代を重ねることで数万の祈りと等しい存在になった。

俺が下らないと思い、価値がないと思っていたものの真相なのだ。「分かったか」

銀朱は俺の目の中に輝いている光を覗き、頬へ当てた俺の手に自分の手を添えた。

あんだけ乱暴されたというのに、体は警戒を示さずに体温の感じない手を受け入れた。

「分かったのなら想え」

銀朱の言葉に時が止まったかのように、世界はシンと静まりかえった。

「お兄様を想え。お前は『柚子』なのだから
銀朱の要請に頷く。

そうするしか俺の人生に先はないのだ。

目を閉じて、脳裏に『あぶらあげ』の形を思い浮かべる。

見せてもらった錦絵の横顔が脳内の暗闇を消すかのように、浮かび上がった。

声は知らない。

『あぶらあげ』、聞こえるか

俺からの呼びかけに答えるように、底の底からかすかに声が聞こえる。

『 祐喜』

反応に、いける、と思った。

何かがあぐんと俺に近づいて、紐付いたような感覚がする。

手を伸ばせば届く気がした。

思い描いた錦絵を破るように、光が満ちる。

言葉が響いてくる。

これが所謂、神託というものなのだろうか。

俺が認識できるほどに声が大きくなるのを心静かに待ち、たぐり寄せようと必死になる。

『 祐喜、……、……、』

名前の後に、まだ何か続いている。

俺は必死にその声をたぐる。

『銀朱に力を貸してはいけない!』

静電気が走るような衝撃を感じ、俺はバツと目を開く。

銀朱の頬に添えていた手を、勢いよく引いた。

「どうした？ お兄様のお姿を見つけたか？ 何かお応えになったか？」

俺を怪訝な目で見つめ問い正してくる。

「え……、あ、いや、何か掠ったけど、まだ、何も……」

俺の呆けた返事に、銀朱は思い切り頬を膨らませ不満を露わにしてみせる。

膨らんだままの頬に指をさして空気を抜いてやると、赤面した銀朱がポコポコと俺を叩いてきた。

いや、それ痛くないんだけどね銀朱さん

そんなことより、なんだ今の。

今の声は『あぶらあげ』なのか？

銀朱に力を貸すなって、言ったよな？

俺が怪訝な表情で銀朱を見つめるので、銀朱も俺の胸をどこかかと叩く手を止めた。

「しかし、全く手応えがなかったわけでもないのだな？」

「あ、ああ……」

「よかった、やはりお兄様は消えてしまったわけではないのだ。』

柚子』の呼びかけに応じられる。よかった。ああ、よかった。よし、よくやったぞ愚図。褒めてやろう」

銀朱は初めて俺に笑顔を見せた。

それから『あぶらあげ』の錦絵を差し出した時と同じような陽気さで、茂野を呼んで食事と酒を運ぶようにと声高に命じると、俺の手を引いた。

「褒美に愚図改め、阿呆と呼んでやろう。どうしてもと言うなら名

前を呼んでやっても……」

「銀朱、お前さ……本当に『あぶらあげ』の妹なのか……?」

「今更何を言うのか！ 無礼な！ 『大江山』銀朱といえば、『紅葉山』のお兄様の最も寵愛深き……ッ」

俺の呆然とした眩きに、銀朱は水を差されたとはかりに不機嫌そうに背を向ける。

「やはりお前は阿呆ではなく愚図で十分だ、いや、^{カス}滓が相応しい」
ここまで来ると、何て呼ばれてもいい。

本気で安堵した表情の銀朱を疑う気にはなれないが、俺の頭の中に響いた声は明かに銀朱を拒んだ。

銀朱が初めて笑顔を見せたというのに、俺はそれに驚いたり毒を投げる気持ちになれなかった。

第五譚

夕餉。

季節を感じさせる食膳が用意され、銀朱はよっぽど嬉しいのか酒まであおっている。

そもそもここでのんびりと食事を楽しむために来たわけではない。『あぶらあげ』が生きていることが分かったのだから、俺をもとの人の世界に返せと言ったが当然のように銀朱は却下した。

借り物競走を始めたのなら、きちんとゴールまで借り物を持って来いということらしい。

俺は一度だけ繋がった『あぶらあげ』との交信で得た言葉の意味を、胃の中でぐるぐるさせたまま黙々と食事を続けていた。

もう一度『あぶらあげ』を探してみたが、今度は全く声は聞こえてこなかった。

銀朱はにこにこ上機嫌で、茂野から注がれた酒をくびくびと飲んでは開け、飲んでは開けて忙しい。

無邪気に喜んでいるその裏に 本当は何かあるんじゃないかと、怪訝な表情を向けると銀朱は真っ赤な顔をして漆の器を俺に差し出した。

「ううい！ 注げ！ 屑！」

どうやら俺は、愚図から滓カスに格下げされ、最終的に屑まで落ちたようだ。

「どうでもいいけど、神様のくせに悪酔いとかするなよ、人間臭いなおい……」

「ばあか、そなたらが我らを模倣したのだろうが」

身を乗り出すと、銀朱は空っぽの盃で俺の頭を軽く叩いた。

うっとおしいな、と思ったところで茂野がさりげなく銀朱を上座に戻した。

おお、さすがはあちゃんにも助け船と言われていただけあって、

扱いがうまいぞ。

「ここ数日食事も喉を通らなかつたのですから、あまり無理をなさ
いませんように」

「こいつ、そんなに兄貴を心配してたつていうのか？」

茂野は視線だけ寄越し、それから俺へ居直った。

考えてみれば茂野が俺と正面を向かつて話をしようとするのは初
めてのことだった。

「どれだけ心配しておられたかは、お前が身をもつて知っているだ
ろう。ひとの子をこの場に持ち込むことなど、長い大江山の歴史で
もなかつたこと。そして、推奨されたことでもない」

茂野は上座の銀朱に急かされて盃に酒を注いだ。

俺はこの年だから酒の味なんて知らないけど、色は透き通りゆら
ゆらと金箔が浮いている。

「銀朱つて……『あぶらあげ』に嫌われてるつてことは、ねえよな
？」

俺の質問に、茂野は朱塗りの銚子を持つ手を止めた。

銀朱は酔っ払っていて俺の言葉など耳に入っていないようだ。

陽気に盃を傾けている。

「『大紅葉山』のお心内を私が計ることはできないが、銀朱様は『
大紅葉山』の寵愛深い妹君。お前の危惧はあり得ない」

「じゃあ、さ……なあ、本当にお前たちは『あぶらあげ』が望むこ
とをしているのか？」

俺が言葉に迷う姿を見かねたのか、それとも俺との会話に意味が
ないと思ったのか背を向けて銀朱の方へ居直ってしまう。

銀朱は顔を真っ赤にさせて一気すると、笑顔全開でもう一杯、と
盃を茂野に差し出した。

その盃を茂野はひよいと高く持ち上げ、銀朱は盃を追いかけて視線
を上へ上げる。

突然顔を上げてしまったからか、目眩を起こしたかのように銀朱
の青い目が瞼に覆われた。立ちくらみを起こした銀朱は茂野に支え

られて上座で横になった。

酔いが回ったのか眠ってしまったかのように見えるが、俺には茂野が銀朱を眠らせたように見えた。

どこか掴めないところがあるけど、茂野は銀朱のやっていることに従っているし、銀朱を大事に思っているようにみえる。

どうやら銀朱にこの話は聞かせたくないようだった。

「先ほどお前に、『大紅葉山』は何と囁かれたのだ」

茂野の言葉に、俺は銀朱が眠っているのを確かめてからありのままを伝えた。

「……銀朱様に力を貸してはいけない？」

正直に告げたのは、銀朱が『あぶらあげ』の妹で、本当に『あぶらあげ』を大切に思っているということが俺みたいな奴にも分かったからだ。

だからこそ、その言葉が引つかかっているわけだけだ。

茂野は俺の言葉に、一瞬だけ思考を内側に投げすぐに俺を見た。

「間違いなく『大紅葉山』がそう仰ったのか」

「いや、声だけだから俺は、『あぶらあげ』の声なんて知らないし。『あぶらあげ』は山に戻りなくなったり、消えたがっているってことはねえよな？」

「『大紅葉山』は愛するものへの眼差しを絶やす方ではない」

茂野の言葉には、重みがあった。

「どんな苦境に置かれても、身を落としても、守るべきものを守り通す御方だ」

俺にはさっぱり分からないが、ジジイが言うのだから経験から来ているものだろうと思わされる。

「だからこそ、こうして『大紅葉山』への敬意を失ったお前を銀朱様もここへ呼ばれたのだ。全くお前に望みがないと思っただら、ここへ呼ぶこともない」

「俺は『あぶらあげ』に愛されてる　ってヤツだな」

そんな感じは全くないけどな。

だつたら呼んだら喜んで飛び出してきてもいいはずだしさ。

「じゃあ、『あぶらあげ』が山に戻ると不都合なヤツとか、いる？」
俺はすやすやと気持ちよさそうに眠る銀朱へ視線を投げた。

こいつは『あぶらあげ』が消えたことを、『柚子』である俺のせいでと決めつけ、実際それ以外考えつかなかったのかもしれないけど、もしかしたら銀朱も知らない組織が『あぶらあげ』を拉致つたって可能性だつてある　と思う。

茂野は否定したけど、まあ銀朱が嫌われて探されたくないっていう可能性もな。

「俺はこつちの事情は知らないけど、居なくなつたままならその方が好都合つてヤツが、『あぶらあげ』のフリして邪魔してきてる可能性だつてあるだろ」

茂野の無言は、いるという返事に等しかった。

「俺が神様を信じないままだつた方が、好都合な奴らがいるわけだな」

茂野はどう対処すべきか考えているのか、俺の言葉に返答せずじつと虚空を睨んでいる。

「一刻も早く『大紅葉山』のご無事を確かめねば、お前自身の命の保証もできなくなる」

「ばかいうな。ここにいただけでも充分死刑宣告中だよ」

俺としては早く『あぶらあげ』を銀朱の元に返して、俺は家族の元に帰りたい。

「銀朱様にこの件をお伝えするな。繊細な御方ゆえ、万が一『大紅葉山』のお言葉であつた時にどれほど苦しまれるか想像に難くない」
必死の思いで探している相手を見つけた時、探して欲しくなかった、放つておいてくれなんて言われたら。

そりゃシヨックだろう。俺だつてそのくらいは想像つく。

「私は心辺りを確認する。お前もひとの里に戻りたければ『大紅葉山』に呼びかけ真偽を確認するのだ」

茂野はすつと立ち上がると、食膳を下げて戸を閉めそれから姿を

見せなかった。

俺も色々考えようとしたがこっちの事情は分からない。

とにかくもう一度『あぶらあげ』へ呼びかけようときゅっと目を閉じた。

銀朱に見せてもらった錦絵をもう一度思い浮かべる。

いくら呼びかけても駄目だ。やはり全く反応がなかった。

「なんか、もうちょっと『あぶらあげ』に繋がるもんじゃないか……お供えなんて持ってきてねーし。御守りは銀朱のだし、あーくそ！地元だからって御守り買わないでいた俺の馬鹿……！」

頭を抱えて大声を上げると、その声で銀朱が目を覚ましたのか耳をピンと張って顔を上げた。

「お、起きたかよ……悪いけど錦絵以外にもっと『あぶらあげ』と繋がりそうなもんを持って」

「その『あぶらあげ』という呼び方ッ」

銀朱が話途中の俺の言葉を遮り、ピシッと指差してくる。

呂律が回っていない。

まだこいつ酔ってる。

「お兄様を供物の名で呼ぶなど、何度も何度も何度も言っておるだろおーが！ お兄様には立派なお名前があるのだ、そのような名前前で呼ぶなッ！」

よれよれと銀朱は説教しながら俺の肩を掴んで立ち上がる。

二歩後退し、軌道を修正しようと俺に寄りかかる。

容赦なく寄りかかり銀朱は俺に覆い被さって本殿に倒れた。

「こ、こら おいッ！ どけ！どけてー！」

被さった銀朱を押しわけようとすると、銀朱は青い目を開いて「私に命令するな屑！」と大声を上げて俺を見下ろした。

白銀の髪が垂れて俺の頬を擦る。

滝のように降り注ぐ美しいストレートはもとより、急接近した青い目は体の毒だ。

吐息に負けて目を閉じたら次の瞬間には何もかも持っていかれて

しまいそうだ。

「俺には袖香が袖香が……って、あ？」

頬に冷たい感触があった。

また雨が降ってきたのだと思ったが、この雨は銀朱の青い目から落ちてきていた。

長い睫に雫をつくり、震える唇に合わせてゆるゆると揺れている。

「お兄様が、私を嫌っているというのは、どういう見なの？」
げっ

何……酔っ払った振りして聞いてたのかよ。

「いや、だつてほら、お前……えっと」

『あぶらあげ』が銀朱を拒否したことまでは聞いていなかったの
だろうか。どう話せばいいかわからなかったが銀朱には話すなと茂
野に言われたばかりなので口籠もった。

「お前はいい、いつだつて、お兄様から愛されている」

銀朱が唇を噛む。噛みしめて血でも出でしまいそうだと思うと、
手が勝手に動いてその唇を押さえた。

噛むなよ、と言いたい俺の主旨を銀朱は理解したのか、柔らかな
唇を震わせるに留めた。

「お兄様に嫌われていたとしても、私はこうするしかないのだ」

銀朱がぼこ、と俺の胸を叩いた。

「私だつて、お前達と同じくらい……、同じ、くらい、お兄様が…
…、『紅葉山』の、雅親まごちかしん朱秦お兄様が……」

痛くない一撃は、ぼこ、ぼこ、と三度続いて止まった。

静かになる。

銀朱は動かなくなった。

「銀朱……さーん……？」

また泣いているのかとおそろおそろ声をかける。

俺の胸にうづくまっっている銀朱をちよんちよんとつつく。

銀朱は安らかな寝息を立てはじめていた。

人間を敷き布団代わりにする神様。

どこか俺の信じる心が、変な方向に固定されそうだ。

「おい……期待するイベントなしなら、どいてくれよマジで……」
でもちようどいいくらいの重みだったので、無理矢理どけるのは止めた。

『あぶらあげ』にもし嫌われていても、それでもいいという銀朱の気持ちは、なんだかとても人間臭い気がする。変な　へんてこなドS稲荷神だと、思う。

『あぶらあげ』を、銀朱の処へ返してやりたいと思った。
いや、望まずともそうしないと俺の人生消滅なんだけどさ。

触れるのに躊躇いのあった白銀の髪に手を伸ばす。硝子細工のよ
うな髪が清水の流れのように纏まっている。そつと撫でると、艶
つとした質感が指に残る。

同じくらい白い頬は酒を飲んで紅色に染まり、涙で濡れた目頭は
しつとりと濡れていた。

『あぶらあげ』、お前の妹が、泣いてるぞ……。
心の中で問いかけても、返事は帰ってこない。

もう一度錦絵を借りてイメージを固めてみるかとも思ったが、ず
つしりと乗っている銀朱が邪魔で動けないし、どこにしまっ
ても謎。

どうしたもんか

「ぐす……お兄様……」

もぞもぞと寝言を口にした銀朱に刺激されて、先ほど銀朱が口走
った名前を思い出す。

『あぶらあげ』の　本当の、名前。

まさ　まさ　？

「雅親……」

まさちか……紅葉山に残る九尾の狐伝説史跡の名前。

九尾雅親伝承跡。

「しゅ……しん」

紅葉山のとっぺんにある本殿の名前は、朱秦稲荷と言う。

山に点在する大小の社をまとめて、紅葉山稻荷大社とそう呼ぶのだ。

「『あぶらあげ』は、雅親朱秦つて名前　なのか」

俺の本当に小さな呟きは、俺が知覚できない世界に大きな波紋を広げた。

ビクン、と大きな痙攣をしたのは眠りについたはずの銀朱だった。大きな青い目を開いて瞼を開ける。

酔っていたのが嘘のように半身を起こし外を睨んだ。

「お兄様の気配　……！　間違いない、お兄様。お兄様……お兄様ッ！」

銀朱は勢いよく俺を踏み起き上がると、本殿を飛び出た。

履き物も履かずに境内に下りると、目にも止まらぬ早さで漆黒の山中へ飛び出して行った。

茂野も何かを悟ったのだらう、本殿へ駆け戻ってきた。

銀朱が山の中へ消えたことを告げる。

茂野は（わざわざ銀朱の履き物を抱えて）銀朱が消えた山中へ向けて走りだす。

俺には全く変化が分からないが、ここにおいても確認できないので暗闇に消えた二人の後を追いかけてようと慌てて縁側から下りた。

コンバースの靴がないけど、今はそれどころじゃない。

常夜燈が灯ついても暗い山の中を走れるか分からないが、銀朱や茂野の名前を呼びながら行けば誘導してくれるだらう。獣道は分からないので俺は境内正面の石段から下りようと足を踏み出した。

俺は、やっと借り物競走に終わりを告げることができそうだった。形を知り、名前を知り、手の中にある探し人の形は明確になった。あとは、俺が手を引いてゴールまで連れていくだけだ。

「よし、よしよし、やったこれで、帰れる……！」
踏み出した足は、すぐに止まった。

静かな境内。

主である銀朱も侍従の茂野の姿もない。

完全なる無人　無神のこの境内で、常夜燈に灯されて影が伸びていた。

「え……」

宵闇にも負けずに伸びる影は、俺がよく知るひとの子だった。

「柚……香……？」

柚香は月を背負い、稲荷の世に降り立ち黒い目で俺を捕らえ立ち尽くしていた。

第六譚

どこかほつとする反面、状況整理を求められた。

柚香がここにいるはずがない。

もしかしたら銀朱が俺を牛馬のように働かせるために人質気分で神隠ししてきたのかも思ったが、だとしたらこんな処で自由に歩いているはずがない。

間違えて紛れ混みましたという世界でもないだろう。

ここは人の世界ではないのだ。

自分でもびつくりするぐらい今まではできなかった馴れ馴れしさで、柚香の両肩に手を置いて存在を確かめる。

柚香はそれを拒否する様子はなく、むしろほつとした顔をしてみせた。

銀朱と違って温度を感じる。

あたたかい、人しか持っていない温もりだ。

たった数時間しかここにはいないはずなのに、忘れかけていた質感で、とてもリアルなものに感じた。

「どうしてここに」

「祐喜を助けに来たんだよ。他に何かあると思ってるの……」

柚香は俺の服の裾を掴むと急ぎ足で石段を下り始める。

濃紺の空に浮いた月と常夜燈だけが足元を照らす。

「どうやってここに？」

あ、いやなんていうか、俺だってよく分かってるわけじゃあないんだけど。

「それより逃げよう祐喜。銀朱がいない間に！」

「銀朱のこと知ってるのか！？」

雨に濡れて砂利はぬらぬらと光り、靴を履かない俺の足の裏を土汚れですぐ真っ黒にさせた。

柚香は早い。紅葉山でのランニングの成果だろうか、夜目も利い

ているようで本殿から伸びる急な五十段の石段を駆け下りる。

周囲はシンとしていて、唾を飲む音さえ聞こえてしまいそうだ。

「知ってるよ。祐喜だっておばあちゃんから聞いてたでしょう？」

「いや、ばあちゃんから聞いてはいたけど……！」

まさかばあちゃんこっちの世界に入れるとか！？

俺だって異次元へ行き来する超能力なんかがあるって聞いていたら、もうちょっと前向きに日課をこなしていたはずだ。

だがそんな話は聞いたことがない。『柚子』はこの世界には踏み込めない。

いつも『あぶらあげ』側から、姿を見せてくれていたと聞いている。柚香あのな、俺がいつも供物届けてた『あぶらあげ』だけどあいつ、いなかっただよ」

「いなかっただも何も、視えないって言うてたし、ウチの女の仕事だして言うて、取り付く島も無かつたじゃない」

柚香はこの期に及んで何を言うのかという調子で返してきた。

「そうなんだけど、俺が無視してたとかじゃなくて、そのものが居なくなっただんだよ。銀朱はそれを見つければよとしてんだ」

柚香は足を止めて、袖を掴んでいた手をぱつと離れた。

「祐喜、どうして銀朱の味方をするの？」

「そついう訳じゃないよ」

「向こうでは祐喜がいなくなっただけ2年も過ぎてるんだよ！？ おじさんやおばあちゃんがどれだけ心配してると思ってるの！？」

柚香の語る言葉は、『現実』だ。

思わず言葉の勢いに足を止めてしまう。

「私だって心配したんだから……」

視線を外して、柚香は制服の裾をぎゅっと握り締めた。

背が伸びて、高一の時には少し不格好だった制服がぴったり体にあっている。

チェックのハイウエストのスカートは高一の時と丈が変わって、少し詰めたのか膝上だった。

ほんの少しだけの違い、俺から見ればいきなりのチェンジにしか見えないけど、現実で二年を経て起きたゆるやかな変化なのかもしれない。

ただ天真爛漫ってオーラだけだった柚香の横顔に大人びた影が落ちて、少女らしさより女性らしさが滲み出る。

俺は現実から置いていかれているのだと、柚香の姿を見て感じた。「祐喜は私が、私が本当にただのトレーニングの為だけに毎日紅葉山走ってたと思ってたの……？ 夕飯の残り物だなんて言って、毎日おかずを持ってきたりしたのは、どうしてだか分からない……？」向かい合って、大きな柚香の黒い目を見つめる。

強い意志が込められた目からは、今にも涙が落ちてしまいそうだった。

「祐喜を心配してるからだよ」
どくん。

心臓が激しく音を立てて、外の音を断ち切った。
勝負の時間がやってきたと言わんばかりに、体中が緊張で固まった。目の前の柚香が、答えを求めて俺の顔をじっと見つめてきた。

「それなのに銀朱の肩を持つのか？ 神様信じてないって言ったのに、そんなにこっちはよかったの……？」

一秒が、長い。

この世界の一秒が、元の世界では何分なのか計算をする気にはならないけれど、元の世界の時間ほど消耗した気持ちになる。

「か、勘違いするなよ！ 別に銀朱は俺が好きだとかじゃない！」
こんなところまで助けにきてくれたのに、拒否の態度に見えたのなら、誤解だ。

「俺は穩便に『あぶらあげ』を戻して帰ろうと」
「その通りだ。お前の役目はまだ終わってはいない」
よく通る声がして、俺と柚香は駆け下りてきた石段へ視線を上げた。

白髪交じりの髪を結った茂野だった。

こんな処で口論している暇はなかった。

茂野は右手に物騒な白刃を携え、月光を照り返してゆつくりと石段を下りてこちらへやってきた。

青い目が車のテールランプのように闇の中に軌跡を描く。

皺の入った顔も手も、衰えがフェイクであるかのように声に力があつた。

様になりすぎている帯刀姿からは、鈍感な俺にもビシバシと伝わってくる殺気が放たれている。

「茂……野」

「お前は銀朱様のお許しがあるまで社殿から出ることは許されていないはずだ。止まれ 戻って来るのだ」

「だ、だけど……ほら、『あぶらあげ』の気配が掴めたって言うてただろ、俺はもう用無しだろ!？」

答える代わりにちらりと茂野は袖香を見た。

どうみても俺は脱走しているわけで、鬼のような制裁を加えられるのは簡単に想像できた。しかも一人じゃなくて袖香もいる。

と、なれば。どの道、もう逃げるしかない!

袖香も茂野は敵だと分かっているのか、俺の腕を引っ張り走りだした。

「面倒をかけるな」

茂野の声は石段の上からではなく前方からした。

胸の前で合わせていた手を大きく二回打って、俺と袖香へ突き出す。

それは何の合図だったのか分からないが、俺と袖香は茂野を追い越すことはできずに透明な何かに阻まれ転倒する。

尻餅をついて前方を視てもそこには何も無い。

手を伸ばし押ししてもそこから先の空間は断絶され、景色が絵であるかのように先にも後にも進むことはできない。

全体を覆うかのように透明な檻に閉じ込められてしまった。

茂野がゆつくりと近づいてくる。ざりざりと玉砂利を踏む音だけ

が耳に染みる。

銀朱には喜怒哀楽があった。

でも茂野は始終、感情の起伏がない。

こいつ、実は銀朱より、怖いヤツなんじゃないだろうか

逃げるどころか、身動きもまともに取れない。

月を背にして茂野が俺から柚香へ視線を移ろわせた。

「この世界へ入り込むとは、希有なひとの子だ　だが、邪魔立ては無用」

白刃が柚香に向けられる気配を察し、柚香を守ろうと抱き寄せる。逃げられないのなら、ここで滅多斬りにされて殺される他にないだろう。

「祐喜、駄目……!!」

「俺は本殿に戻るから、戻るから柚香は傷つけないでくれ。ちゃんと『あぶらあげ』は銀朱のところに帰ってくるようにがんばるから、だから頼む!」

「駄目!」

柚香がここに来て一番大きな声を上げた。

「駄目!銀朱に力を貸してはいけない!」

その言葉に、俺も茂野も動きを止めた。

柚香はその一瞬を好機と見てか、黒い目を輝かせた。

右手が動き　透明な壁を風ぐ。

その動きに茂野は何を感じたのか、一足飛びで後退した。

ピツと繊維が切れる音と共に、茂野の着物を切り裂く。

左手に巻いていた数珠のようなブレスレットも切れて、虚空に星を散らした。

ころん、ころんと石段に珠が落ちて行く。

退いていなければ、茂野は今頃真つ二つだ。

呆然としているのは俺だけでなく茂野も同じだった。

ざり、と袖香の靴が砂利を踏み音を立てる。

長い黒髪が揺れ、闇と同化している。漆黒の目は燃え茂野を威嚇していた。

右手にはいままで持っていなかった『もの』が握られていた。

茂野が帯刀する白刃と似た、ほのかに反りのある打刀。

切先は紙一枚ほどの厚みも感じさせないほどに鋭い。

鐔から柄頭まで金糸で輝き、赤い小さな房が垂れていた。

「それ その、劔は」

茂野と俺の驚きを無視して、袖香は切っ先を振って見えない壁をもう一度切り裂いた。

都会のデザイナー制服を着た袖香には、ミスマツチすぎるその帯刀姿。

「あなた達が『柚子』を使うのは許さないわ。それが許されるとしたら『あぶらあげ』だけじゃない？」

達、と言われてやっと気づいた。

茂野で俺達を挟むようにして、石段の向こうに銀朱の姿があった。初めて俺と会った時と同じように、銀朱は怒気を孕んだ視線で俺と袖香を見つめている。

銀朱は俺以上に汚れた足袋と、裾の汚れた着物を引きずり、近づいてくる。

傍らには『あぶらあげ』の姿はない。

「お前……なぜお兄様の劔を持って居る。それは『紅葉山一ノ宮麓』だ」

銀朱の目に袖香の持つ刃が映る。銘を紅葉山一ノ宮麓と言っただろうか。

三日月のようなその白い線は遠くからでも銀朱の目を明るく照らしている。

名からして紅葉山のもの。

そしてただの一振りでないのは日本刀に詳しくない俺にも伝わってきた。

「私を感じたお兄様の気配はそれだ。お兄様とお兄様の侍従しかしか振るえない刃。それをなぜひとの子が振るっている」

「答えてあげたら祐喜を返してくれるの？ もう私達ひとの子に干渉してこないって約束する？」

銀朱は柚香の言葉に足を止め、茂野と黙って柚香を見て居る。

一挙一動に対応しようとしているのが肌から伝わってきた。

俺は銀朱の青い目が、初めて警戒を帯びているのに気づいた。

全くもって未知のものを見るかのように凝視している。だが銀朱と茂野の視線に屈することなく、柚香は堂々と劔を構えて威圧を跳ね返していた。

「お前は……何なのだ。本当に愚図と同じ、人間か？」

「紅葉山の里のどこにでもいる人間よ。『柚子』じゃなくたって『あぶらあげ』を想っている人間だっているのよ」

いや、想っていたってそんな劔振り回したりこつちの世界に入っでドンパチできるなんて俺は聞いたことがない。

柚香は 俺とは、違う。

「つまり 第二の『柚子』というところか」

俺の思考と並行して銀朱が呟き、茂野が続けた。

「ですがひとの子が、我ら稲荷の世の侍従が授かる御神刀を振るうことなどできません。紅葉山一ノ宮麓』を振るう器は『大紅葉山』、もしくは侍従しか」

茂野はそこまで言う口を噤んだ。

その表情からは、それはあり得ないという意図を感じた。

銀朱に茂野がいるように『あぶらあげ』にも侍従がいるということだろうが、それが柚香であるはずがない。それは俺だって賛同だ。柚香は人間だ。

俺が千パーセント保証できる。

なんてっただって神様を信じていなかった俺が十年間近く見てきた。質感だっただってある、幻聴ではないのだ。

「茂野、まさかお兄様が、こんな小娘を己の侍従にしたと考えたわ

けではないだろうな。いくらお前でもそれは侮辱に値する」

銀朱が自分の侍従にそこまでいうくらいだ、あり得ないのだろう。

「それにもし、柚香が『あぶらあげ』の侍従だとしたら」

俺の言葉の先を把握したのは茂野だ。

柚香が『あぶらあげ』の命令で動いているとしたら、銀朱は『あぶらあげ』に嫌厭されているということに繋がる。

「長い歴史の中でこのような連関があったとは聞いたことはありませんが、この娘はまさか、『大紅葉山』を有しているのでは」

茂野が銀朱にもう一つの定義を投げかける。

俺には茂野の言葉が難しく理解できないが、柚香は理解したようだった。

ほのかに口元に笑みが宿った ように見えた。

「馬鹿なことを言うな茂野！ お兄様ほどの方がこんな齡の満ため小娘に捕らわれて力を奪われていると言うのか!？」

「ですが、そうでなくては、筋が通りません」

茂野の推察でしか柚香の行動の見きわめがつかないのだろう。

怒りながらも銀朱は否定を返せない。

今までの『柚子』^{おれたち}はただ『あぶらあげ』に寄り添っているだけだった。

しかし柚香は 第二の『柚子』は天女伝説のように『あぶらあげ』を捕らえ、力を使うことを覚えた

本当の『柚子』が無関心でいる間に、新しい『柚子』が生まれていたということなのか。

「さすが茂野ね。聞いた通り本当によく頭が回るのね」

そつだとするなら、柚香が『あぶらあげ』を銀朱の元に返す訳にはいかないだろう。

銀朱は警戒から怒りの炎へ感情を切り替えた。

「お兄様はどこだ」

柚香は答えない。

銀朱は俺に突きつけた言葉をもう一度繰り返した。

「お兄様を 帰してもらおうぞ、 柚子」

第七譚

蛍 だろうか。

ひとと神の間を、緩やかな曲線を描いて横切る。

誰もその光を目で追わない。

沈黙が場を支配していたが銀朱はその間に色々と合点が行ったよ
うだ。扇を広げ、バシツと音を立てて手の平に叩きつけ閉じた。

「お兄様の気配を探しても探しても見つからなかった理由がよう分
かったわ。この世にはおられないのなら、見つかるわけがない。お
前がお兄様をこの世界から奪ったのだな」

ざわざわと鎮守の森が揺れる。

雷鳴を呼びそくな雲行きは銀朱の心と呼応しているのかもしれない。
い。

月が雲に隠れ全員の影を塗りつぶす。

「奪ってなんていないわ」

柚香は落ち着いていたが、銀朱はそうもいかない。

柚香越しに俺へ命令してきた。

「愚図、死ぬ気でお兄様を呼び、このお門違いの小娘がどこぞに封
印したお兄様を解放するのだ」

「祐喜、やめて。力を貸してはいけない ううん。貸さないで」

白刃に映る柚香の横顔が揺らで俺を映す。

するどい切っ先は俺の首を飛ばすこともできるのかもしれない。

ゴクリと息を飲んだ。

「ただでさえ『柚子』などというやつかいなひとの子がお兄様の心
を乱しているのに、次々と湧き出てこられては迷惑千万だ」

柚香は銀朱の言葉に異論があるようだ。

「『あぶらあげ』を呼び戻せたら、祐喜をどうするつもりだったの
？」

「格別に用もない。当然ひとの世に返してやるつもりでいた。だが、

そうじゃなあ。ここまで話がこじれると、色々と面倒であるから」

銀朱は扇でポンと首を叩いた。

首を飛ばす、という意味だ。

柚香を挑発しているのだと思うが、本当にやりかねない。

「そんな予感がしてたのよ。ただで帰すわけないわよね。神隠しに合つて無事に帰ってきたひとはいないがセオリーよ。祐喜聞いたでしよ。駄目よ絶対に」

「愚図、神の力に魅了されたひとの子にまともな話が通じると思うな。そのおなごにうまく使われているだけだぞ。お兄様の力を独占するために『柚子』のお前が邪魔なのだ」

眼光鋭い女子二人に思い切り睨まれて、俺は動けない。

俺がどうにもできないのを理解してか、お互いの口上はエスカレートしていく。

「『あぶらあげ』は帰れないのよ。分かって」

「勝手にお兄様の言葉を代弁するでないッ！」

「私は嘘なんて言わないわ。『あぶらあげ』はここには戻るつもりはない。私と一緒にいるのよ」

「いけしゃあしゃあと、ひとの子だと思って殺さずにおこつと手を抜いてやっておるのを、実力と読み違えておるのではあるまいな」

銀朱は扇をぼきりと折ってしまいそうな勢いで、手が大きく震えている。

「『あぶらあげ』は『柚子』の側にいたいのよ」

「それが貴様自身だと言うか！ 思い上がりもいい加減にするのだな。認めたつもりはないが、お兄様の気に入りのひとの子はその愚図ただ一人だ」

「そうね、そうよね。分かっているわ。私は『あぶらあげ』に特別に愛してもらうなんて無理よ。でも銀朱。分かっているけど、どうしようもないことがあるのは、あなただって分かっているでしょ」

どこか、柚香は自分に言い聞かせるように囁く。

その反動のように顔を上げてきっぱりと続きを放った。

「第一『柚子』は祐喜。『あぶらあげ』は私なんだから気にかけるのは当然なのよ」

一瞬、この場にいる誰もが耳を疑った。

だが聞き返すことができるのは俺だけだった。

「え？　　柚香、今何て」

柚香は凜とした声で再度宣言した。

「私が、『あぶらあげ』なの」

「何……言つて、るんだ」

銀朱の猛攻に対して隙を作るための虚言かと俺は思った。

柚香が『あぶらあげ』とか　ありえない。

「柚香は、人間……だろ！？　俺がずっと視てたじゃないか！」

「そう、私……歴とした人間よ。でもここに『あぶらあげ』がいる」とん、と柚香は自分の胸を指した。

「『あぶらあげ』は私を依り代よにしてるの」

「依り代……？」

摩訶不思議世界の法則なんて分からない。

だがその響きは、嫌な予感しか感じさせなかった。

「つまり私は『あぶらあげ』でもあって、柚香でもあるってことなの」

理解できない俺の顔を見下ろして、柚香はため息をついて話始めた。

それは今から十六年前に遡る。

柚香は生まれてからまもなく、右足に重篤な障害を持って居ることが発覚した。

手術が成功すれば歩くこともできるが、手術に堪える体力を得る頃には同時に病気も進行し生きてはいられない。

毎日が綱渡りで、投薬と間をつなぐための手術の繰り返しだった。希望は奇跡しかない。

柚香の両親は当然神様にすがった。

「それ、祐喜が拾ってくれた御守り」

柚香は俺のポケットの中のキティ御守りを指差す。

俺は急いで御守りを返した。

「失敗しちゃったね。これを落とさなければこんなことにはならなかった」

自嘲気味に笑いながら柚香は御守りを握り締める。

「足が治りますようにってお母さんが買ってくれたの。紅葉山にやってきたのだから回復祈願と病気治療のためだよ」

柚香が引越してきた理由を、そういえば聞いたことがなかった。都会にいたのにどうしてこんな田舎にやってきたのか、疑問に思うことがなかった。

「私はね、祐喜のお母さんが事故後に搬送された大江山麓の知恩病院に入院してた。そこで『あぶらあげ』に会ったのよ」

柚香は今でも『あぶらあげ』との出会いの細部を覚えているという。

痛みに苦しむ額を、小さな黄金色の神様がそつと撫でてくれた。

それが最初の出会いだった。

願いを叶えに来たと、そう囁いて。

「それで、『あぶらあげ』が助けてくれたっていうのか？」

「うん。願いを叶えてくれた」

病床で思い描いた願い

思い切り走りたい、学校に行きたい、料理をしたい、恋をしたい

その全てを、『あぶらあげ』が与えてくれたのだ。

柚香の言う事が本当であれば、『紅葉山一ノ宮麓』を振るえる理由も明白だ。

侍従でもなんでもない。

柚香が『あぶらあげ』なのであれば 当然のことだ。

銀朱は柚香が『紅葉山一ノ宮麓』を見せた時以上の衝撃を受けたように、扇を落とし、ぺたんと石段に座り込んでしまっていた。

俺はその二人を黙って見つめることしかできない。

「でも、願いごとが叶うには対価が必要だよ。毎日毎日山を登って回復祈願をしてくれる家族の苦勞だけじゃ見合わなかった。私は対価として『あぶらあげ』に体を貸すことになった」
シャーマンが神を下ろすように、柚香は『あぶらあげ』を体に宿した。

柚香が『あぶらあげ』を捕らえたわけじゃあ、なかったのだ。言うなれば『あぶらあげ』が柚香を捕らえた。逆なのだ。

ただそこには意志の疎通があつて、共生関係があつた。

「でも、なんで『あぶらあげ』は人間の体を欲しがつたんだ……？」

「まだ分からないの？ 『柚子』の、祐喜のためだよ」

「え？ 俺……？」

なんでそこで俺が出てくるの。

俺は開けたままの口をぱつと閉じた。

沈黙。

俺が、『あぶらあげ』を信じていなかったから

「祐喜に視てもらえるように、『あぶらあげ』は人間になったの。祐喜のお母さんは、事故で亡くなったでしょ」

放心状態の俺は、ぎこちなく首を縦に振った。

「祐喜を『柚子』として守り愛して欲しいって、おばさんは『あぶらあげ』に願ったんだって。もう、絶対に自分は助からないから、自分の代わりに守って欲しいって」

「現世でいうところの、十四年前の話か」

銀朱の言葉に、柚香は頷いた。

「『あぶらあげ』はもちろん首を縦に振ったよ。だけど祐喜はその恵みを受け入れる状況になかった。信じなかったから、どんなに『あぶらあげ』が手助けしたくても空振りにならなかつた」
俺が拒否を続けるのだから、諦めればいいのに『あぶらあげ』はそうしなかつたのだ。

柚香の体を借りてひとの世に降りた。

「『あぶらあげ』はこの道を、選んだんだよ」

「お兄様ならやりかねない……」

銀朱は頂垂れて呟いた。

あまりの落胆振りに、それがどれだけ彼らにとって非常識なことかは想像に容易かつた。

『あぶらあげ』は柚香と一緒に十四年間俺の側で、俺を見守ってきた。

夕飯のおかずを作って、毎日供物を届ける俺に微笑みかけてきたというのだ。

「……神域が『あぶらあげ』の生きる場所。それなのに現世に下りてきた。どれだけのことかは分かるよね」

柚香は息を吸って、大きく吐きながら銀朱へ視線を投げた。

銀朱は黙って柚香を見上げている。

「『あぶらあげ』の意志は強い。『柚子』の側にいて、約束を守るためにいるの。だから、銀朱にだって邪魔はさせない。私がさせない」

茂野が話をしていた。

『あぶらあげ』は愛するものへの眼差しを絶やさない。

どんな苦境に置かれても、身を落としても、守るべきものを守り通す御方だ、と。

たしかにその通り。

思いは、とてつもなく大きかつた。

自分が小さすぎて、情けなくなるくらいに。

俺は否定して視ないふりをしてきたものに、愛されていたのだ。

本当に『柚子』は俺で。

俺は『あぶらあげ』に愛されていた。

『あぶらあげ』は『柚子』の願いを叶えて、奇跡を起こしているのだ。

今も。

「そんな顔しないでよ。祐喜が信じなかった　おかげで、私はこうして生きていられる。私は、祐喜のおかげでこうしてるんだから、感謝してる」

柚香は、俺の手をぎゅっと握りしめた。

その温かさがどこか心強い気がして、俺は問い詰めた。

「待てよ。じゃあ『あぶらあげ』がこっちに戻って柚香の中からいなくなったら……」

「足の病気が再発するかもしれないし、もしかしたら消えちゃうのかもしれない。『あぶらあげ』と過ごした日々の記憶が丸ごとなくなっちゃうかもしれない。それは分からない。だから私はこのままでいたかった」

銀朱をはね除けていた意志は、柚香のものだったのだ。

茂野へ視線をやるとどこか　本当に少しだけほっとした顔をしていたような気がした。

「結局、お前の意志でお兄様を留めていることに何ら変わりはないのだな」

口を挟まなかった銀朱が声を上げた。

「お兄様は『柚子』と添えることができればそれでいいはずだ。祐喜が神を視ることができれば、ひとの子の器にこだわる必要などない」

銀朱の言葉は冷徹だ。

柚香もそれはよくわかつているようだ。

「私にとって『あぶらあげ』は特別な存在なのは、分かってくれるよね……?」

当然だ。嫉妬とかそういう対象とは全く違う次元のものだと思う。

『あぶらあげ』は柚香にとって、命の恩人で、友人で、特別な存在なんだ。

「銀朱には悪いけれど、ずっとずっと側にいてくれた『あぶらあげ』と離れたくない。このまま一緒に祐喜の側にいたい。これ以上の奇跡を願うのは贅沢かもしれない。もう充分だつて銀朱は思うのかもしれないけど、ただ受け入れるだけなんてできない」

柚香の手の中の劔が、その望みのために行動した全てを語っていた。

柚香は『あぶらあげ』の望みを叶え、そして『あぶらあげ』と生きるために、自分の望む未来の為にここまでやってきたのだ。

「誰かが妥協しなければ、うまくいかないということならば」

銀朱はそこまで言うと、少しだけ溜めてから続けた。

「その妥協は私が受ける他ないだろうな。そなたらのように矮小で貪欲な生き物に、我慢などということとはできまい」

「祐喜をこのまま返してくれるの？」

「ひとの子に為って愚図を守りたいと、それがお兄様の望みであるのなら私がこれ以上邪魔立てすることはできないだろう。いつかお帰り頂くのを待つ以外何ができる」

「銀朱様、ですが」

茂野が口を挟むが銀朱は応じなかった。

こちらにはこちらの、俺の知り得ない雑多な問題があるのだろう。

銀朱は、本当に虚ろな表情を投げてきた。

やっと見つけた兄に会わずに我慢をするというのは、誰だつて辛いことだろう。

「ひとの子がどうにもできぬことを、どうにかするのが我らの責務だ」

「銀朱が兄貴に会いたい気持ちも分かるよ。柚香と『あぶらあげ』が俺にしてくれたことの大きさも分かる。なあ、考えて両方が幸せになる方法を選ぼう」

俺の言葉に銀朱はムツと眉を寄せた。

「愚図のお前に何ができると言うのだ。この状況で！ 適当な事を言うな！」

「俺は『柚子』だから、できるよ」

その一言で、何もかもが片付いてしまいそうな気がした。

銀朱も俺のその言葉に、考えが読めたのか噛みつく姿勢を解いた。初め『あぶらあげ』を呼んだ時、拒否されたのは柚香というフィルターはあったからだ。

無理矢理『あぶらあげ』を呼び戻そうとして拒否したからであって、協力してさえくれれば、多分 いや絶対に、俺は『あぶらあげ』と接触できるはずだ。

「柚香の中の『あぶらあげ』を呼んでもいいかな？ 『あぶらあげ』と二人で、話をしたいんだ」

第八譚

借り物競走のラストスパートに入ろうとしている。

「頼むから銀朱『あぶらあげ』と話くらいはさせるよ。そうしないと絶対にお前兄貴に嫌われるぞ」

石段に座っていた銀朱は、俺の言葉にピンと耳を立てて不快を示す。文句を言おうとしたようだが、何も言わずに飲み込んでみせた。了解ということなのだ、勝手に判断した。

こいつはただ、本当に兄貴が心配で愛おしくてしょうがないだけだ。

柚香の気持ち優先してやりたいけど、兄貴を思う姿を見せられたら無碍にもできない。

とんでも無く一方的で、正直迷惑だと思っではいたけど、俺は銀朱が行動してくれなければ神様を信じることも、価値を理解することもできなかつたのだ。

そここのこは、感謝しておくべきところだと思うのだ。

「しかしどうする気だ。お前ができることなどその小娘の垢ほどないのだぞ」

「そりゃ、俺は真正正銘……ただの人間だからなあ。神様を宿して日本刀振り回して俺を迎えにきたり、問答無用でひとを神隠しに合わせて踏んだり蹴ったり酔って襲ってきたりはできないよ」

俺の言葉に銀朱と柚香は同時にむくれてみせた。

どこかこの二人似てるなあ。

「それでもやっぱり『柚子』だから、『あぶらあげ』を呼ぶことができる、唯一のひとの子のはずだから」

「お兄様に願うのか」

銀朱はすぐに俺のやろうとしている事を理解したようだ。

「銀朱が帰りを待ってて、柚香は一緒にいたくて、俺も……お前を視てみたいってそう言って相談してみる。全部叶えてくれるかは分

からないけど、『あぶらあげ』じゃなきゃできないし、できる気がするよ」

「お兄様を信じているのか……お前が」

「俺はどこかのドS稲荷さんに、神様を信じるよーに教育されたもんでね」

銀朱がさらに頬を膨らませたので、その頬へ指をやって空気を抜いてやった。

柚香へ視線を投げる。

「大丈夫、やってみようよ」と肩をポンと叩くと、するりと力が抜けてしまったかのように柚香も石段に座り込んでしまった。

「……『あぶらあげ』、私が中学に入る頃からほとんど出てくることはなくなっちゃったの」

つていうと、俺が小学四年とかからだろうか。

あの頃から俺はいっぱしに家業を否定しはじめていた。

銀朱にも告げたように俺は心の中だけでなく口にして『あぶらあげ』を否定していた。

「祐喜がいなくなつて、『あぶらあげ』が死んじゃうんじゃないかって怖かった。でも銀朱に神隠しに合つて、その目的が『あぶらあげ』を連れ戻すことだつて知つて私、邪魔することしか思いつかなくて……」

柚香は俺の手をぎゅっと握りしめた。

「分かつてる。大丈夫だよ」

柚香の目から涙が落ちる。

石段が涙を受け止めた。

「『あぶらあげ』は柚香の願いはもう叶えてくれないかもしれないでも、俺の願いはまだ叶えてないはずだし。だから柚香が『あぶらあげ』と一緒にいたいって思いを叶えてくれるよ。じゃあ、ちよつと呼んでみる。拒絶するなよ？」

うん、と柚香はただ首を振った。

俺より年上であれから二年も経つてもっと大人になったはずだけ

ど、こつやつて我慢する仕草は本当に変わらないんだな。

柚香は俺の宝物だ。

「あぶらあげ」

柚香の肩に手を置いて、目を閉じる。

心には名前が、瞼の裏には錦絵の姿が浮かぶ。

『あぶらあげ』を見つげる全ての条件は揃ったのだ。

脳裏に描いた姿を掘り下げていく。

『あぶらあげ』

名前を呼ぶ。

小さな光が見えてきて、その光の点に向けて俺は意識をぐつと潜らせた。

光をへ到達しようとするのを遮ろうとする闇を、一閃が薙ぎ払った。

柚香自身が俺を助けてくれたのだと分かる。

暗闇の先は、明るい世界だった。

柚香の心の中なのか、どこか別の空間なのか、少なくとも現世でも常世でもない。

地に足をつけている感覚がするが、地面は見えない。

光に負けないように細めていた目を開くと、小さな点が見える。

平泳ぎをするように、今度は光の中の小さな闇に向けてより深い処へと下りようと進んだ。

『……ねえ、ねえ……あぶらあげ……』

知らない女の声がする。

でも温もりのある優しい声だ。

『私……今すごい、たくさん、血が出て、もう駄目だってそんな気がするの……』

声がかすれている。

おぼろげな記録が再生されて、乳白色の空間に反響していた。

『お願いがあるの、祐喜の、私の、子供のこと……。私が死んでしまったら不憫な子になってしまうからお願ひ、どうか守ってあげて』

……あなたがいれば、いつだって柚子は幸せになれるから』

俺はその声が母さんの声だと気づいた。

こんな声をしていただけだと思うと、肉体などない精神世界だといふのに涙の味がした。

母さんの願いの返答は聞こえない。

その代わりに近づいてくる闇一点が、おぼろげな輪郭を見せてきた。

『お母さんにもお父さんにも、もう心配をかけさせたくないの……』
今度は小さな女の子の声がした。

『もう熱で苦しまなくても、注射も点滴も手術もないの？ 本当？
そのしゃべり方は、袖香に似ていた。』

『私の願いを叶えてくれるの？ 狐さん……』
袖香の願いの返答は聞こえない。

柔らかな世界がただ、いくつもの声を反響させているだけだ。
黒い点が近づいた。横に長い。輪郭は緩やかに丸い。

さらに近づくと色づいた。

収穫期を迎えた紅葉山の麓の田畑が実らせる、金色の稲穂の髪。

紅葉に彩られた山の色彩を閉じ込めたような被布の衣。

白い肌に詰め込まれているはずの目は恐らく血の色。

手の届くところにいるその存在は、目を閉じて眠っていた。

手を伸ばして髪に触れるとふんわりと焼きたてのパンのような質感が返ってくる。

『あぶらあげ』

名前を呼ぶと、小さな体を少しだけ動かして『あぶらあげ』は反応した。

細く開いた瞼の中から、赤い目が見える。

ルビーの様に美しいキラキラとした大きな目だった。

『長い間ごめんな。もう俺はお前を視ることができるようよ』

むくりと起き上がった『あぶらあげ』はまだどこか覚醒に足りない表情をしてこちらを見て居た。

『そうか』

想像以上に、シンプルな返答だった。

大喜びとかそういうリアクションはない。

まるで何もかも分かっているような口ぶりにも思えた。

『お願いがあるんだ。俺の願いをお前は……叶えてくれるかな』

俺は願いを口にしようとしたが、『あぶらあげ』はそれを制した。

『きっかけと』

『あぶらあげ』の声が少しづつはつきりしてくるのが分かる。

ぼんやりと雲に包まれた世界が、崩壊していく。

色や音が戻ってくる。

中へ中へと意識を潜らせていた場所から、引き上げられて風を感じる。

「きっかけと　それを貫こうとする思いがあれば、我らの力なくとも成就する」

風が頬を打ち、虫の音を取り巻く。草木が揺れて宵闇が広がっている。

一寸遅れて俺の感覚は　現実に戻ってきていた。

誰かに頬を叩かれて、目が覚めるのと似た感触。

少し湿った土の臭いも、森の緑も生命力に充ち、俺はここが銀朱達の領域ではなく現世、ひとの世界であると悟った。

ぼつりと、露草の葉にのっていた雨粒が地面に落ちる。

において分かる。ここは大江山じゃない。

霧を纏う朝の紅葉山だ。

俯いていた俺の視界には、放り投げたままの両手を握り締める

体温の感じない白い手があった。

俺の手と同じくらいかそれより少し小さい。貝殻のような小さな爪が光っている。

おそろおそろ手の甲から腕へと視線を滑らせる。

「しかし、たまには私達が存在する理由を、示さねばならないな」
腕から胸元にかけて視界を占領したのは、紅葉山を秋に真っ赤に

染める紅葉と同じ色の被布の道行。

きつちりと着付けした襟元は橙色で、少し長い金色の髪が掛かっていた。

風に揺れる髪は自由奔放で、赤い目が優しい笑顔を浮かべている。昇ってきた陽光を受けて、金色の髪は光の矢のように透き通ってみえた。

「愛し子に振り返ってもらえないというのは、やはり寂しいからな」
「あ…… あぶら…… あげ……」

無意識に俺は手を握りしめ、手の上に俺の涙が落ちた。

夢の中で甘く響いていた声は、しっかりと俺の鼓膜を叩き心に響いてくる。

「いかにも、私がそなたの『あぶらあげ』だ」

銀朱に見せてもらった錦絵の世界が眼前に広がっている。

錦絵ではどこを見つめていたかは分からなかった。

「ただこの『あぶらあげ』は俺を愛おしそうに、じっと見つめていた。」

「そなたの願い、聞き届けた」

第九譚

俺の手を握りしめていた手を離すと、『あぶらあげ』は屈んでいた体を起こした。

小さな体の後ろには、ひよっこりと九尾が覗いている。

おまけのようにちょこんと『あぶらあげ』の金髪の間からも、狐耳が生えている。

周囲を見渡し、立ち並ぶ鳥居と景色から紅葉山のどのあたりであるか推測した。気愈く昇り降りしていた俺でも毎日毎日登っていた山の景色くらいはちゃんと覚えている。

場所は二ノ宮の真ん中。二十八基めの鳥居のあたりだ。

崖下に樹海のように広がる紅葉の林、通称紅葉野の向こう日の昇る方角には大江山がある。

立ち上がると、少しフラフラした。

体中の血が一点に集まっっていて、ようやくと全身に回って動き出せる。

そんな感じだ。

「お兄様！」

俺が声をかけようとするのと遮るように高い声がした。

振り返ると同時に、俺の肩を思い切り押しつけて銀朱が飛び込んできた。

朝日に照らされた長い白銀の髪についてに頬を叩かれ、せっかく立ち上がったのによるける。

『あぶらあげ』は銀朱の突撃を受けながらも、俺の腕を掴み、倒れるのを阻止してくれた。銀朱は当然俺など目に入っていないように、自分より一回り小さい兄貴にを抱きしめて頬ずりした。

銀朱が力一杯抱きしめるので、『あぶらあげ』は苦しそうだったが押し返す様子はない。甘んじて受け止めるようだった。

それは俺が再会を願ったからでもなく、『あぶらあげ』自身も望

み、もつというなら銀朱自身が強く願っていたから他にない。いつそギリギリという効果音をつけてやりたいくらい銀朱は『あぶらあげ』を抱きしめて離さない。

「本当にすまなかった。決してそなたを邪険にしたかった訳ではないのだ」

ポンポンと『あぶらあげ』は銀朱の背を撫でてぎゅっと抱きしめた。

「こんな私でも大事に思ってくれるものがいることを忘れてはいけなかったな。心配をさせてすまなかった。ありがとう銀朱」

さすが兄貴というべきなのか、そう言われては何も言えなくなる。それともその言葉だけで銀朱は充分だったのだろうか。

銀朱はもう文句を言わずに『あぶらあげ』の胸にうずくまる。

「それで柚香は」

俺の問いかけに、『あぶらあげ』と銀朱は同時に顔を上げた。

「まさか、俺の……柚香の願いは 叶えられなかったのか？」

『あぶらあげ』が単身で存在しているということは、柚香から切り離されたということになる。兄貴と再会したいという銀朱の願いは叶ったが、柚香はどうなってしまったか分からない。

まさか柚香が言っていたように、最悪の最悪 消えてしまったということでは……

「柚香が考えていた最悪はない」

『あぶらあげ』は一呼吸置いて続けた。

「だが、一つ認識を改めて貰わねばならぬことがある」

『あぶらあげ』とは初対面だから、声というものを感じるのもこれが初めてだったはずなのに不思議と長年つきあった友達のようにさらさらと心に染みてくる。

もうどんな不思議も受け入れられるつもりだったが、やっぱり都度驚かされる。

「私は奇跡の類で病を完治させたわけではない。私は柚香の生命に恵みをもたらし、寄り添っていたただけだ。私が離れた今、その病が

再び目を覚ますことになる」

つまり柚香は麻酔が抜けた状態だということだろうか。

足の病気が再発して、痛みで動けなくなっているのだとしたら、今度こそ俺が助けにいつてやらないといけな

「柚香はどこに」

もう『あぶらあげ』に願いを叶えてもらうわけにはいかない。

大人になって手術することができれば、柚香の足は治る可能性があるのだと言っていた。

今なら神様の力を借りず、柚香の力だけで克服することができはずだ。

周りを見ても銀朱はいるが柚香の姿はない。

「銀朱！『あぶらあげ』会いたさに、柚香を大江山に置いていったんじゃないだろうな」

「阿呆が！ お兄様の依り代に万が一があつて、お戻りになれないとなったら何とするか。あの小娘なら しかるべき場所にやつてある」

大江山の麓にある知恩病院。

そこは 母さんが事故にあつて運ばれ、そして死んだ病院だった。

『あぶらあげ』にとつても、あまりいい思い出のある場所ではないのは察するが手を引いた。

「『あぶらあげ』行こう。手術をするなら側にいてやらないと、柚香はお前と一緒にいたいんだ。力になつてやつて」

『あぶらあげ』は俺の手をそつと解いた。

「いや、それはならん」

「な……なんでだよ。俺はお前と柚香がこれから一緒にいられるようにって願ったのに、叶えてはくれないつっていつのか」

「一緒というのなら、私はいつでもずつと一緒だ。しかし今はならん」

『あぶらあげ』が何を躊躇しているのか分からない。

こんな時だからこそ、神様にすがりたいという気持ちで『あぶらあげ』には分らないのだろうか。

食い下がる俺と『あぶらあげ』の静かな横顔を見て何を思ったのか、銀朱が一步前に出て俺の手を取った。

「そんなに我らに側にいて欲しいなら、私がいてやる。行くぞ」

「ちょ　待て、『あぶらあげ』も一緒に」

「また、二十八基の鳥居の下で待つておるよ。その時に　　柚香と一緒においで」

『あぶらあげ』の返事はそれだけだった。

俺は銀朱に衿をつかまれて空を舞い上がった。

だれかが見たら人が空中を飛んで居るように見えるのかもしれないが、こんな朝早くに空を見上げる人影はなかった。

「どうして『あぶらあげ』は来てくれないんだよ。柚香がもし失望して　手術に向かう気力を失いでもしたらどうするつもりなんだ。

柚香は……柚香は、『あぶらあげ』が好きなんだよ!!」

「お前は本当に愚図だな。お前のことを思っで行かなかったのだ」

「俺……を思って?」

「あの小娘は、お兄様を心から信頼しておられる。目が覚めてお兄様とお前が並んでいたら間違いない最初に手を取るのはお兄様だろう。それで傷つくお前を視たくないのだ」

俺の下らない嫉妬を、すでに神様は把握していたようだった。

唇をぎゅっと閉じたことで、銀朱は話を変えた。

「第一、お兄様がおられなくても手術は失敗などしない」

「どっからその自信が……」

「愚図。お前は　私が何者であるか忘れたというわけではないだろうな」

え、ドS……稲荷神……さんです、よね。

「私はお前にちゃんと名乗ったぞ。私は『大江山』稲荷神、銀朱。退魔を司り、鬼・疫病の類を寄せ付けはしないと」

「それは　……聞いたけど、銀朱が柚香の願いを叶えるっていう

のか？ 『あぶらあげ』がいなくなっちゃえば、お前にとって袖香
なんか……」

「阿呆」

銀朱は一喝して、空から舞い降り俺をポイと放り捨てた。

大江山の麓、知恩病院の裏山からごろんごろんと転がり落ちて、
松の木にぶつかって止まる。

「そなたの考えはいつも一直線で周りを思いはからぬな」

体中についた泥を叩いて立ち上がる俺に、銀朱はわざわざ言いた
くもないが、と断りを入れて続けた。

「どうして貴様が私を視たか思い出せ」

「どうしてって……袖香が大江山のキティ御守りを落としてそれを
拾ったから、お前と繋がりができて……」

「無信心なお前と私を繋いだあの守り札、あれに込められていた思
いにこの私が答えずにいると思つてか」

あれは、袖香の両親が病気の回復を願って買い求めたもの。

込められた願いはたった一つだけだ。

「こうなつてはあの小娘に借りがある。お兄様もお望みだ。必ず」

紅葉山』に返さなければならぬ」

銀朱の呼び声に答えて、茂野が姿を現した。

どこにいたんだと叫びたかったが、考えてみれば袖香を病院まで
届けてくれたに違いない。二、三やり取りを躲すと、銀朱は侍従を
従え病院へと歩き出した。

が、突然足を止めると俺へと振り返った。

「何を泥まみれで呆けている。私があの小娘を助けても、お前があ
れの心を支えなければ何の意味もない。その役目をお兄様はお前に
与えたのだぞ」

泥まみれにしたのはお前だろ。

「一緒にお兄様のところへ行く。それがお前達『柚子』の仕事だ」
銀朱はもう振り返らない。

聞き返すことはできなかつたけど、銀朱はたしかに『達』と言っ

た。

柚香を助けてくれる気なのだ。間違いない。

泥を払い俺も急いで病院に駆け込んだ。

柚香の両親を見つけて状況を聞こうとしたら、泥まみれの俺の存在の方に驚いてみせた。俺は二年行方不明になっていたのだから当然といえば、当然の反応だった。

家に連絡を入れると言ってくれたがその前に柚香の状況を聞いた
だす。

柚香は数ヶ月行方不明になっていた処、病院前で倒れているところを保護されたと言う。命に別状はないが、足に痛みを訴えていてすぐにそれが、病気の再発だと二人は気づいたそうだ。

柚香はすぐに手術へ向かうことになり、急なことに今はその準備にあぐねているところだった。

「柚香は何か言つてませんでしたか」

「祐喜君をずっと心配してたのよ。こうしてこの時に祐喜君が戻ってきてくれたのは神様のおかげなのかしら。そうよね。そう、柚香は大丈夫よね」

震えるおばさんの手を掴んで、自信満々頷いてやる。

「大丈夫。神様がついてるよ」

俺らしくない言葉だった。

だけど今はその言葉にどれだけの意味があるか自分でもよく分かっていた。

おじさんが手術室前の待合室に俺を通す。

待つしかないが、俺は祈る姿勢を取った。

山を動かさない『あぶらあげ』を呼ぼうとしているのか、助けると言った銀朱を信じるためか、なにより柚香自身の力を信じようとしているのか、指が手の甲をきつく締め上げる。

暫くして連絡をしてくれたのか父さんやばあちゃんがやってくる。

事情の説明に困ったが俺が『あぶらあげ』の名前を出すと、ばあちゃんは余計な騒ぎを起こさずにただ頷いてくれた。

「『あぶらあげ』がいるから、柚香ちゃんは大丈夫だって思ってたんだけどね。そうか帰っていったのかい、あちら側に」

「ばあちゃん、柚香が『あぶらあげ』だったって知ってたんだな」「全く気づいてないお前を見て、やっぱり『あぶらあげ』が視えてないんだって思い知らされてたよ。本人に供物を運ばせる阿呆がどこにおるね」

だから、俺が柚香に供物を運ばせるのを代わりにやって欲しいって言った時、あんなに怒ったんだ。

「ごめん もうあんなこと言わない」

「神隠しにあつて人が変わって帰ってくるって話はよく聞くが、よりによって銀朱のおかげで『あぶらあげ』を視れるようになるなんて、思ってもみなかったよ」

そういえばばあちゃんは、銀朱が好きじゃなかったんだっけな。

ドS同士で仲が悪かったに違いない。

「あの女狐、よくも私の孫を二年も奪っていきおった。今度会うことがあったらただじゃあおかないよ」

ぶつぶつと文句をいえばあちゃんを横目で見た。俺の感覚で昨日別れたばあちゃんは、ひどく年老いて見えた。

曲がった背中、やせ細って脈の浮いた手。垂れた瞼で目が半分隠れてしまっている。

俺が帰ってくるまで生きててくれてよかったと本気で思った。

ばあちゃんを置いて都会になんて行けない。

「でも、これでよかつたんだよ」

ばあちゃんは杖に両手を置いて、柚香の両親を遠目で見た。

「何が？」

まさか足の病気が再発したことを喜んでるわけじゃないよな。

「『あぶらあげ』が気にかけていたんだよ。柚香ちゃんは『あぶらあげ』を受け入れる以外の選択肢がなかったから、ひとの子としての人生を歪めてしまったって」

「でも『あぶらあげ』が助けなきゃ、柚香は今日まで生きていられ

なかつただろ」

「私だつてそう言つてやつたよ。『あぶらあげ』はそういうことを気にするんだよ。でもこうなつたら、柚香ちゃんは一ひとりだ。これからは一人で生きて行かなきゃいけない。辛いかもしれないけど、みんなそうやつて生きてるんだからね」

「俺がいるよ。同じ人間の俺が……『あぶらあげ』みたいにはできないけどさ……」

「あんたみたいな子で柚香ちゃんがいつて言つてくれるならそれでいいけどね。柚香ちゃんが嫁に来てくれたらいいねえ、あんたみたいに不信心なことを言う『柚子』を育てたりしないだろうよ」

「そうやつて『柚子』増やしていくことはつか考えるの止めるよばあちゃん、正直、自分の存在価値見失うからさ……」

「あんたにはまだ分かんないだろうね。でもすぐ分かるよ。自分の子にもその孫にも、『あぶらあげ』と会つて欲しいつてそう思う日が来る。義務感じゃなく自分で繋げて行きたいつて思えるんだよ」
「なんか嫁とか早計なことを言ってくるし、ツッコミしてやりたいところは色々あるけどやめておいた。」

『あぶらあげ』の優しさを語るばあちゃんの横顔は、いつもよりずっと優しげなのだと思つた。

いつも偶像妄想の話を聞くのも嫌で顔を見なかつた。

俺はばあちゃんがじいちゃんとう結婚することで『あぶらあげ』を捨てたと思つていたけど、そうじゃないんだ。

ばあちゃんも、柚香も、同じように『あぶらあげ』を思っている。多分、俺もこれから。

「『あぶらあげ』がここに来なかつたのは、そういうことなのかな……」

俺が一人で結論に至ると、ばあちゃんが聞き返してきた。

「柚香は側に居て欲しいつて言つてたんだ。まあ心の半分を失つちやうみしたいなもんだからそりゃ当然だよな。でもなんていうのかな、独り立ちつていうのかな。柚香が本当の意味で一人で立てるように

なっってから今度は自分から会いにきて欲しかったのかなって」

「柚香ちゃんだって分かってるよ。あんたよりずっと賢い子だ。『あぶらあげ』はいなくなったりしない。『柚子』のあんたがこうして信じているんだから、また絶対に会えるってね」

手術開始の報告を受ける。

借り物競走は終わったのだ。

あとは共に走ったものたちと、盛大に健闘を語るだけにしたい。

俺は自然と両手を組んで、祈るように手術終了を待った。

最終譚

その後、とにかく色々大変だった。

なにせ俺は二年も行方不明で中学留年だし、柚香だって行方不明で、それが同日に発見されたわけなので、新聞に小さく記事が載ったりした。

紅葉山で神隠しか 大江山麓で兩名発見。

警察に「隣の山の稲荷さんがいなくなったので、大江山の稲荷さんに救助要請をされて神様のところへ行っていました」なんて言えるわけもなく、とにかく犯罪との関わりだけはなかったという証明をするので精一杯だった。

俺達が大変だったように、『あぶらあげ』も色々大変だったよ
うだ。

それでも俺はあれから毎日『あぶらあげ』に会いに山へ登った。
供物のあぶらあげを手に、山を登る。

柚香の病状の話をする。

留年のせいで学校面倒くさいという話をした。

二年もスキップしたのに、世間は変わらずお先真つ暗な様子だ
という話もした。

毎日とはとても忙しく、だが確実に過ぎているという話。

不思議と、話題が尽きなかった。

『あぶらあげ』はいつも俺を笑顔で迎え、俺の話を興味深く聞いてくれたからかもしれない。時折ふかふかの九尾で俺をくるんでみたり、髪を撫でてきたりする。

このふわふわもこもこに、イチコロにされたのかもしれない。

先祖も そして、柚香も。

『あぶらあげ』が俺の視線を先を追いかける。

そこには、柚香と銀朱がいた。

仲良くとも言い難いが、並んで三色団子を食べている。

話のネタは大体俺の悪口だ。『あぶらあげ』の扱いが悪いとか、高校に行かずに家業を継ぐことにしたのはいいものも、まだてんであぶらあげはまずいとか。

柚香は『あぶらあげ』を視れるようになった俺を、現金だよねえとか、冗談交じりに嫉妬して責めてみせる。

銀朱はニヤニヤしながらその話を聞いて、俺を罵倒したり柚香を不憫に思ってみせたりする。

正直退院してからの柚香は、銀朱の『柚子』のような気がしてならない。

「変なの。どうして柚香は銀朱と仲良くなるんだ」

「共通の敵がいるからではないか？」

「なに、それってもしかして俺なの……？」

俺は結構、柚香の気持ちに報いるために粉骨砕身したつもりなんだけど。

見舞いにだって行っただし、退院後、約束通り一緒に紅葉山に御礼参りもした。

あの時、柚香の手はずつと震えていた。

俺はぎゅっとその手を握って支えてやった。

柚香と共に『あぶらあげ』のことが視えますようにと一段、一段上りながら祈った。

柚香はまだ全回復とはいえない足で少しづつ昇った。

足の痛みに表情を曇らせた時、休もうかと言ったが首を横に振ってみせたっけ。

「祐喜だっけ自分から神様を信じた。私だっけ今度はちゃんと自分から『あぶらあげ』を視てみせるんだから」

ばあちゃんが言っていた通り。

柚香は賢くて、絶対の心を持っていた。

だけど、こうやってがんばっては見せてるけど、視えても視えなくても、絶対泣くと思ってた。その時はさひとの温かさで抱きしめてやるうと思っていた。

女子が泣いたらどうしていいか分からないのは、もう昔のことだ。二十八基目の鳥居の下で小さな金髪の神様が視界に入ると、俺の助けを振り切り、松葉杖を放り投げて柚香は走った。

痛みと俺の存在はすっかり忘れられた。

正直、俺の入る間なんてない。

柚香の涙を拭う役目は、まだ俺には回ってこないようだ。

いつの間にかやってきたのか茂野が不憫そうに俺にちらりと視線をやり、銀朱は遠慮なしに陰湿な笑いを俺に投げた。

柚香は俺に、「やっぱり祐喜だけじゃ『あぶらあげ』が心配」と言っただけで俺と同じように紅葉山に通っている。

現金なのはどっちだよ。俺を口実に山に登ってみたりして。

本当は俺と一緒に山登りたいだけなんだろッ……とか言ってみただけで、微妙な笑顔で見つめられるだけだからやめておく。

微妙。なんだかとも、微妙な気分だ。

俺が『あぶらあげ』に嫉妬して、

柚香が『あぶらあげ』を見るようになった俺に嫉妬して、

銀朱は会った時からひたすら俺に嫉妬して、虐めてくる。

なんか変だこの構図。

「たしかに柚香は『柚子』の先輩だけどさあ……俺、まだ不十分かもしれないけどさあ、銀朱と結託して俺をいじるのはどうかと思うんだけどさあ……いざって時は実は俺が一番役に立つ男だってーの、分かってないよなあ」

むくれる俺の横顔に『あぶらあげ』が指を伸ばして頬の空気を抜いた。

ぷし、という音がして空気が抜けると、『あぶらあげ』は嬉しそうに笑った。

「何だよ、お前俺の真似すんなよな。ほらまたあの二人こっち睨んでる。あいつら絶対俺の事、嫌いだよな」

ちよっと照れながら答えると、『あぶらあげ』は満足そうに笑った。

「目で見えるものが、全てではないよ『柚子』」

地方都市の山合いを走る線路が、鬼の伝承で有名な大江山を越える。

青葉のトンネルをいくつも越えると、赤いアーチの仙峡大橋が見えてくる。

紅葉山を水源とする錦大川をまたぐこの橋は水面からの高さは約七十メートル。車窓からは、左手に大江山、右手に紅葉山と名勝を独り占めできる。

感動はまだ続く。仙峡大橋を抜けてすぐ。

単線になって最初に巡る駅の名は紅葉山参道駅。

駅を降りてまっすぐに伸びる石畳の参道は、五十年前に敷き直され、街頭も古いガス灯を模したものに換えられた。

降りて頂ければ分かるだろう。

眼前に構える紅葉山の言葉にならない素晴らしさ。

言葉にならない何かを、あなたは得ることができるはずだ。

神様の為に誂えられたこの紅葉の山は、稻荷名山として名高い。

どんな神様がいるのか知りたい時は、山を散策すればいい。

深い緑の香り、手から伝わるふかふかの土の感触、風が頬を撫でる優しさで自ずと想像がつくだろう。

それでも想像が難しい時は、そうだな。

揚げたてのあぶらあげを手はこの山を上り下りする男女を見つけるといい。

多分その男の方が、俺だ。

恋人同士の邪魔をしてはいけないなんて思わずに、気軽に声をかけてくれたらいい。

あなたにたくさん話をすることができる。

神隠しに合つて神様が視れるようになった話とか、その事件を機に結婚した奥さんの腹の中に、子供ができた話とか。

なんなら、隣の大江山のドSな稻荷神の話もしてやれる。

時間がなければ、また明日。

その時は、『柚子』さんと呼んでくれれば、俺は必ず振り返るか
らう。

ようこそ、俺の愛する紅葉山へ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1201u/>

ある稲荷の神隠し

2011年8月3日03時29分発行